

椋山女学園大学・大学院 FD活動報告書
(2025年度)

椋山女学園大学・大学院 ファカルティ・ディベロップメント

Faculty Development

第13号 (通巻 第26号)

2025年度

椋山女学園大学・大学院FD活動報告書

椋山女学園大学・大学院 ファカルティ・ディベロップメント

第13号（通巻第26号）

椋山女学園大学・大学院 FD 活動報告書 (2025年度)

目次

1	はじめに	全学FD委員会委員長・大学院FD委員会委員長	五百部	裕
2	全学FD活動報告			
2-1	全学FD委員会記録		2	
2-2	授業アンケート		4	
2-3	各種研修		12	
3	学部FD活動報告			
3-1	生活科学部		14	
3-2	外国語学部		17	
3-3	人間関係学部		19	
3-4	情報社会学部		23	
3-5	現代マネジメント学部		28	
3-6	教育学部		29	
3-7	看護学部		32	
4	大学院FD活動報告			
4-1	大学院FD委員会記録		35	
4-2	大学院授業アンケート		36	
5	研究科FD活動報告			
5-1	生活科学研究科		38	
5-2	人間関係学研究科		41	
5-3	現代マネジメント研究科		44	
5-4	教育学研究科		45	
6	FD委員会名簿			

1 はじめに

はじめに

2025年度 相山女学園大学全学FD委員会委員長

同 相山女学園大学大学院FD委員会委員長

五百部 裕

2024年度より、相山女学園大学全学FD委員会、ならびに同大学院FD委員会の委員長を務めた副学長（2024年度は学長補佐）の五百部です。相山女学園大学および相山女学園大学大学院で2025年度に行われたFD活動についての報告書がまとまりましたのでお届けいたします。本報告書をまとめるにあたり、学部・研究科のFD委員の先生方、教務課・企画課の職員のみなさまにはたいへんお世話になりました。ありがとうございました。

さて昨年度の「はじめに」で、インターネットを利用して実施している授業アンケートの学生の回答率が芳しくないので、今年度の改善が必要と書かせていただきました。しかし、他の業務の忙しさにかまけて、今年度、具体的な解決策を提示・実施することができませんでした。学生アンケートは本学のFD活動の大きな柱の一つであり、その回答率が低いのは大きな問題と考えています。次年度以降の全学FD委員会においては、ぜひともこの課題の解決に取り組んでいただきたいと考えています。

また学修成果の可視化を目指したシステムであるSugi-PORTが導入2年目を迎えました。2024年度はこのシステムの「使い方」を学生・教員の双方に伝えることで精いっぱいだった感がありました。こうした反省を踏まえ、本年度はこのシステムの実質的な活用方法を開発し、それを広く浸透させることを目標としました。そこで、2025年9月にオンデマンド形式で開催したFD研修会では、「羅針盤と道筋によるライフ・デザインの考え方 Sugi-PORTの効果的な利活用の試み」というタイトルで情報社会学部の栗本英和教授に話題提供していただきました。この研修会では、Sugi-PORTを実質的に活用するために必要な学生側の入力内容とそれに対する教員側の対応、および入力時期の見直しなどについて、栗本先生がご自身で収集されたデータを元にお話しいただきました。研修会後のアンケートでは、この研修会に対する全体の満足度について90%以上の方から「満足」「どちらかといえば満足」という回答が得られ、それなりに意義のあるものだったのではないかと考えております。第4期の認証評価においては、学修成果の可視化という点はたいへん重要視されている項目です。そこで、このシステムをより実効性のあるものにしていくことも今後のFD活動において重要になってくると考えています。

このようにさまざまな課題を抱えているFD活動ですので、今後とも皆さまの協力により、よりよい形へと改善を図っていきたいと考えています。よろしく願いいたします。

2 全学FD活動報告

- 2-1 全学FD委員会記録
- 2-2 授業アンケート
- 2-3 各種研修

<p>(第1回) 2025(令和7)年 4月22日(火) 17:00~17:40</p>	<p>1 報告 (1) 2025年度前期学生FDスタッフ申請について</p> <p>2 議題 (1) 2025年度FD活動に関する件 ①2025年度FD活動計画に関する件 ②2025年度前期授業アンケートに関する件 ③2025年度新任教員研修に関する件 (2) その他</p>
<p>(第2回) 2025(令和7)年 5月27日(火) 17:05~17:25</p>	<p>1 報告 (1) 椋山女学園大学改革アクションプラン2025について (2) 2025年度学部FD活動計画について(依頼) (3) 2025年度前期授業アンケートの実施科目確認について (4) その他</p> <p>2 議題 (1) 2025年度前期学生FDスタッフ申請に関する件 (2) 2025年度後期学生FDスタッフ募集要項に関する件 (3) 2025年度FD研修会に関する件 (4) その他</p>
<p>(第3回) 2025(令和7)年 6月24日(火) ~6月27日(金) メール会議</p>	<p>1 報告 特になし</p> <p>2 議題 (1) 2025年度前期授業アンケートリフレクションに関する件 (2) その他</p>
<p>(第4回) 2025(令和7)年 7月22日(火) ~7月25日(金) メール会議</p>	<p>1 報告 (1) FD研修会について (2) その他</p> <p>2 議題 (1) 2025年度学部FD活動計画について (2) 2025年度後期学生FDスタッフ申請に関する件 (3) 2025年度後期授業アンケート実施要領等に関する件 (4) その他</p>
<p>(第5回) 2025(令和7)年 9月23日(火) 16:59~17:26</p>	<p>1 報告 (1) 2025年度FD研修会実施状況について (2) 2025年度前期授業アンケート実施状況について (3) 2025年度後期授業アンケート実施科目(1/4期科目)の確認について (4) 2025年度前期学生FDスタッフ報告書について (5) その他 2025年度後期授業アンケートに係るスケジュール確認について</p> <p>2 議題 (1) 2026年度FD事業推進予算に関する件 (2) その他</p>

<p>(第 6 回) 2025 (令和 7) 年 10月28日 (火) ～10月31日 (金) メール会議</p>	<p>1 報告 (1) 2025年度後期授業アンケート (実施科目確認) について (2) その他</p> <p>2 議題 特になし</p>
<p>(第 7 回) 2025 (令和 7) 年 11月25日 (火) ～11月28日 (金) メール会議</p>	<p>1 報告 (1) 椋山女学園大学改革アクションプラン2025検証について (2) 2025年度FD活動の検証 (中間検証) と2026年度計画について (3) 2026年度新任教員研修計画について (4) その他</p> <p>2 議題 (1) 2025年度後期授業アンケートリフレクションに関する件 (2) 2025年度「今年度の振り返り」と「来年度の目標」に関する件 (3) 2025年度FD活動報告書に関する件 (4) その他</p>
<p>(第 8 回) 2026 (令和 8) 年 1月27日 (火) ～1月30日 (金) メール会議</p>	<p>1 報告 (1) 2025年度 椋山女学園大学外部評価結果に係る報告会について (2) その他 2月以降の各種日程の確認について</p> <p>2 議題 (1) 椋山女学園大学FD活動に関する方針に関する件 (2) 2026年度前期学生FDスタッフ募集に関する件 (3) その他</p>
<p>(第 9 回) 2026 (令和 8) 年 3月24日 (火) ～3月27日 (金) メール会議</p>	<p>1 報告 (1) 2025年度後期授業アンケート結果について 2025年度後期授業アンケート実施状況 授業アンケートから見る学生の自己評価 (2) 2025年度「今年度の振り返り」と「来年度の目標」の入力結果について (3) 2025年度後期学生FDスタッフ成果報告書について (4) その他</p> <p>2 議題 特になし</p>

【前期】

1. 実施概要

・実施期間：(1/4期科目) 2025年5月21日(水)～6月4日(水)

(半期科目) 2025年7月16日(水)～8月1日(金)

・実施対象科目：

◎専任教員

2025年度前期開講の授業科目のうち、卒業研究、受講者数が10名未満の科目を除く全ての授業科目から、できるだけ受講者の多い科目を原則2科目選択

◎非常勤教員

2025年度前期開講の授業科目のうち、集中講義など、実施期間までに授業が完了しない科目を除いた全科目

・実施方法：Webによる

2. 実施科目数及び実施率

学 部		対 象 科目数	実 施 科目数	実 施 率	未実施 科目数
教 養 教 育 科 目		190	158	83.2%	32
専 門 教 育 科 目	生 活 科 学 部	109	99	90.8%	10
	外 国 語 学 部 国際コミュニケーション学部	149	112	75.2%	37
	人 間 関 係 学 部	64	50	78.1%	14
	情 報 社 会 学 部	94	81	86.2%	13
	文 化 情 報 学 部				
	現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	58	45	77.6%	13
	教 育 学 部	117	106	90.6%	11
	看 護 学 部	45	38	84.4%	7
教 職 共 通	7	6	85.7%	1	
計		830	695	83.7%	135

※「未実施科目数」=回答率が0.0%の科目

※参考：2024年度前期授業アンケート実施率 85.0% (687/808科目)

※授業がアンケート実施前に終了する科目は除外した。

3. 総合的充実度（設問12）回答

「設問12 総合的にみてこの授業は充実していた。」

学 部		そのとおりである	どちらかといえば そのとおりである	どちらかといえば そうではない	そうではない
教 養 教 育 科 目		72.3%	22.3%	2.0%	0.8%
専 門 教 育 科 目	生 活 科 学 部	70.4%	22.6%	3.7%	0.3%
	外 国 語 学 部 国際コミュニケーション学部	80.7%	14.4%	2.3%	0.4%
	人 間 関 係 学 部	83.4%	14.2%	0.8%	0.0%
	情 報 社 会 学 部 文 化 情 報 学 部	70.5%	22.4%	2.1%	0.6%
	現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	70.8%	24.8%	0.8%	1.5%
	教 育 学 部	78.7%	16.7%	1.8%	0.2%
	看 護 学 部	72.0%	24.3%	1.5%	0.3%
	教 職 共 通	82.2%	14.1%	3.7%	0.0%
大 学 全 体		75.7%	19.5%	2.1%	0.5%

4. リフレクションの提出状況

学部別提出率

学 部 (非常勤講師を含む。)	アンケート 実施科目数	リフレクション 提出科目数	リフレクション 提出率
教 養 教 育 科 目	158	82	51.9%
生 活 科 学 部	99	69	69.7%
外 国 語 学 部 国際コミュニケーション学部	112	82	73.2%
人 間 関 係 学 部	50	31	62.0%
情 報 社 会 学 部 文 化 情 報 学 部	81	55	67.9%
現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	45	37	82.2%
教 育 学 部	106	65	61.3%
看 護 学 部	38	22	57.9%
教 職 共 通 開 講	6	3	50.0%
全学部 (昨年度前期実績)	695 (687)	446 (458)	64.1% (66.7%)

※10月末までに集計結果及びリフレクションの学内開示（S*mapのキャビネット）

【後期】

1 実施概要

- ・実施期間：（1 / 4 期科目）2025年11月10日（月）～2025年11月22日（土）
（半期科目）2025年12月22日（月）～2026年1月24日（土）

- ・実施対象科目：

◎専任教員

2025年度後期開講の授業科目のうち、卒業研究、受講者数が10名未満の科目を除く全ての授業科目から、できるだけ受講者の多い科目を原則2科目選択

◎非常勤教員

2024年度後期開講の授業科目のうち、集中講義など、実施期間・実施予備期間に授業を行わない科目を除いた全科目

2 実施科目数及び実施率

開講学部		対象科目数	実施科目数	実施率	未実施科目数
教 養 教 育 科 目		144	119	82.6%	25
専 門 教 育 科 目	生 活 科 学 部	116	101	87.0%	15
	外 国 語 学 部 国際コミュニケーション学部	170	133	78.2%	37
	人 間 関 係 学 部	73	55	75.3%	18
	情 報 社 会 学 部 文 化 情 報 学 部	107	75	70.0%	32
	現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	59	42	71.2%	17
	教 育 学 部	100	79	79.0%	21
	看 護 学 部	25	19	73.1%	6
	教 職 共 通	6	3	50.0%	3
計		800	626	78.3%	174

※ 「未実施科目数」 = 回答率が 0.0 % の科目

※参考：2024年度後期授業アンケート実施率（Webで実施） 76.8 %（605/788科目）

※授業がアンケート実施期間外に終了する科目等は対象科目から外した。

3. 総合的充実度（設問12）回答

「設問12 総合的にみてこの授業は充実していた。」

学 部		そのとおりである	どちらかといえば そのとおりである	どちらかといえば そうではない	そうではない
教 養 教 育 科 目		70.3%	22.3%	2.8%	1.1%
専 門 教 育 科 目	生 活 科 学 部	69.2%	23.0%	2.9%	1.0%
	外 国 語 学 部 国際コミュニケーション学部	79.2%	14.6%	1.5%	0.8%
	人 間 関 係 学 部	76.2%	17.2%	1.8%	0.1%
	情 報 社 会 学 部 文 化 情 報 学 部	75.9%	18.3%	1.4%	0.2%
	現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	73.4%	20.9%	1.7%	1.1%
	教 育 学 部	77.7%	17.7%	1.4%	0.6%
	看 護 学 部	73.9%	19.4%	3.1%	0.6%
	教 職 共 通 開 講	61.1%	34.7%	4.2%	0.7%
大 学 全 体		74.0%	20.0%	2.3%	0.8%

4. リフレクションの提出状況

学部別提出率

学部等		アンケート 実施科目数	リフレクション 提出科目数	リフレクション 提出率
教 養 教 育 科 目		119	71	59.7%
専 門 教 育 科 目	生 活 科 学 部	101	84	83.2%
	外 国 語 学 部 国際コミュニケーション学部	133	81	60.9%
	人 間 関 係 学 部	55	41	74.5%
	情 報 社 会 学 部 文 化 情 報 学 部	75	52	69.3%
	現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	42	37	88.1%
	教 育 学 部	79	71	89.9%
	看 護 学 部	19	16	84.2%
	教 職 共 通	3	2	66.7%
大学全体 (昨年度後期実績)		626 (605)	455 (436)	72.7% (72.1%)

2025年度（前期）授業アンケート結果

1. 実施の目的

学生による授業アンケートは、授業が学生にどのように受け止められているのかの全体的傾向を理解し、教員に対して授業の質的向上のヒントを提供することを目的とする。また、学部・学科及び大学全体としてのカリキュラムレベルでのFDを推進するための資料として活用する。

2. 実施時期

実施期間：(1/4期科目) 2025年5月21日(水)～6月4日(水)
(半期科目) 2025年7月16日(水)～8月1日(金)

3. 実施方法

Webによる

4. 実施科目数

学部等	2025年度前期	(参考)2024年度前期
教養教育科目	158	158
生活科学部	99	97
外国語学部・国際コミュニケーション学部	112	104
人間関係学部	50	65
情報社会学部・文化情報学部	81	78
現代マネジメント学部	45	43
教育学部	106	94
看護学部	38	42
教職共通開講	6	6
大学全体	695	687

<凡例(学部)>

生活＝生活科学部

国際＝国際コミュニケーション学部

外・国＝外国語学部(2024年度改組)・国際コミュニケーション学部

人間＝人間関係学部

(2024年度以降は改組した人間共生学科を含む。)

文情＝文化情報学部

情・文＝情報社会学部(2024年度改組)・文化情報学部

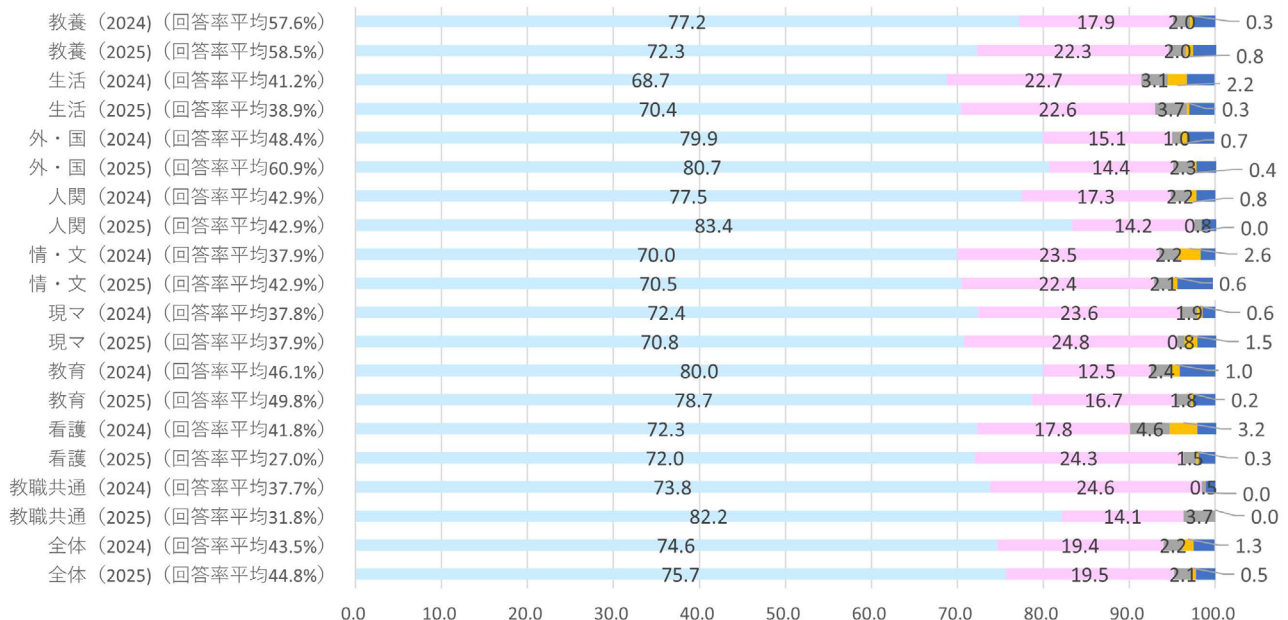
現マ＝現代マネジメント学部

教育＝教育学部

看護＝看護学部

※2023年度から、教養教育科目は、開講学部によらず、すべて「教養教育科目」区分で集計。

総合充実度（全体）



※回答率平均

：全回答者数/全受講者数

■ そのとおりである

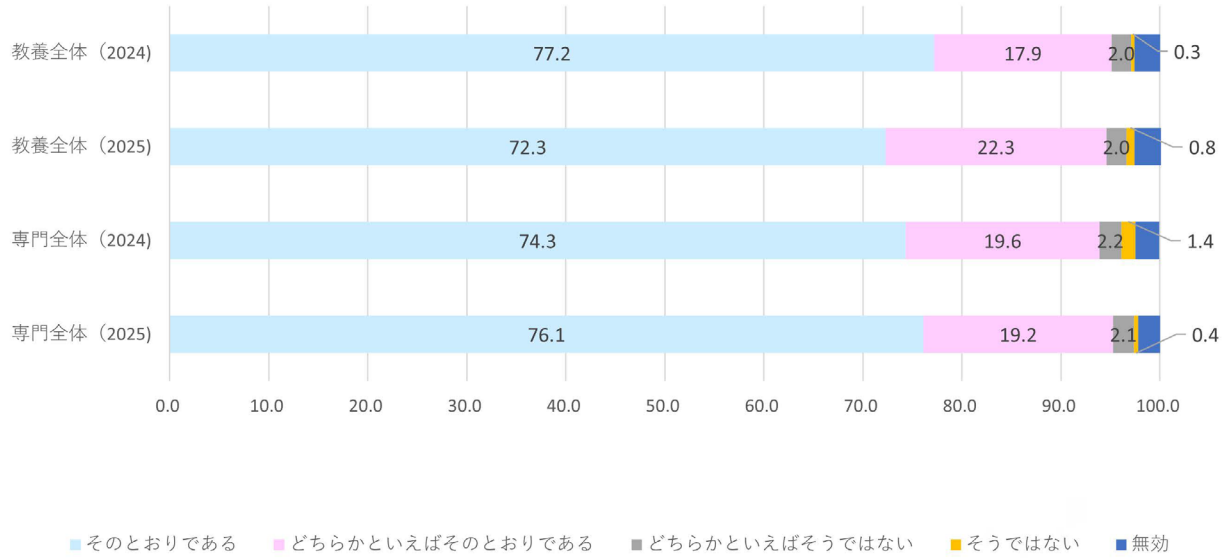
■ どちらかといえばそうではない

■ 無効

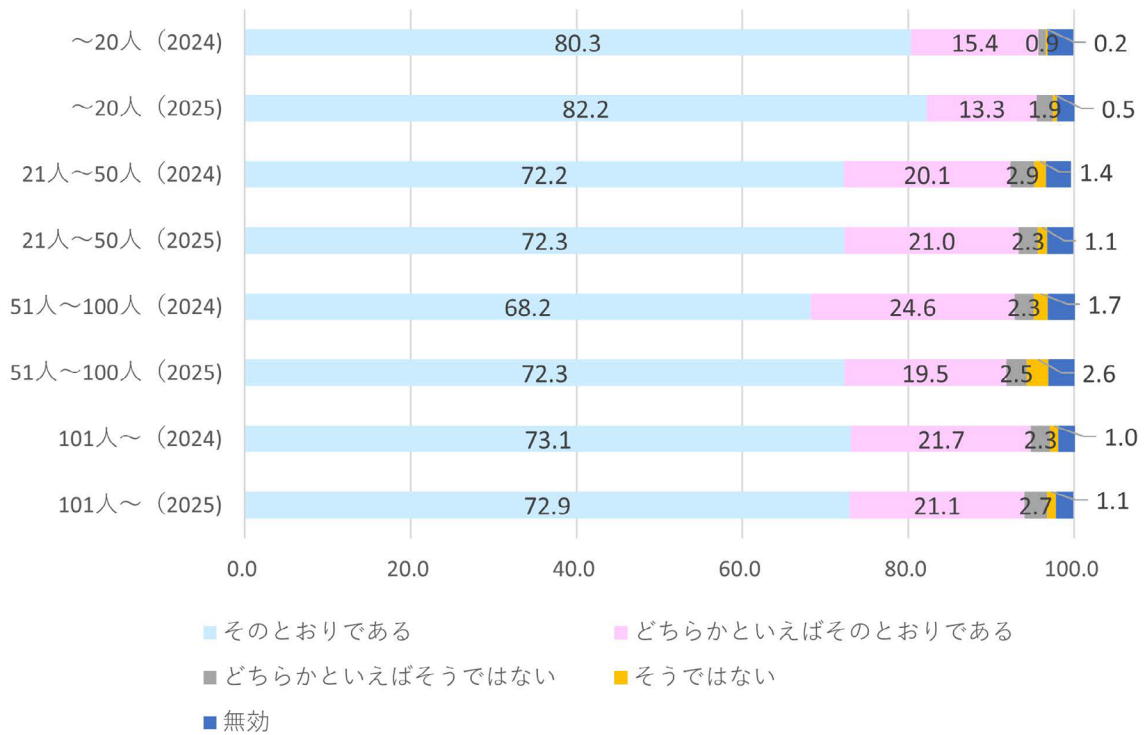
■ どちらかといえばそのとおりである

■ そうではない

総合充実度（教養・専門別）



総合充実度（受講者数別）



2025年度（後期）授業アンケート結果

1. 実施の目的

学生による授業アンケートは、授業が学生にどのように受け止められているのかの全体的傾向を理解し、教員に対して授業の質的向上のヒントを提供することを目的とする。また、学部・学科及び大学全体としてのカリキュラムレベルでのFDを推進するための資料として活用する。

2. 実施時期

実施期間：(1/4期科目)2025年11月10日(月)～2025年11月22日(土)
(半期科目)2025年12月22日(月)～2026年1月24日(土)

3. 実施方法

Webによる

4. 実施科目数

学部等	2025年度後期	(参考)2024年度後期
教養教育科目	119	121
生活科学部	101	96
外国語学部・国際コミュニケーション学部	133	106
人間関係学部	55	64
情報社会学部・文化情報学部	75	76
現代マネジメント学部	42	43
教育学部	79	75
看護学部	19	19
教職共通開講	3	5
大学全体	626	605

<凡例(学部)>

生活＝生活科学部

国際＝国際コミュニケーション学部

外・国＝外国語学部(2024年度改組)・国際コミュニケーション学部

人間＝人間関係学部

(2024年度以降は改組した人間共生学科を含む。)

文情＝文化情報学部

情・文＝情報社会学部(2024年度改組)・文化情報学部

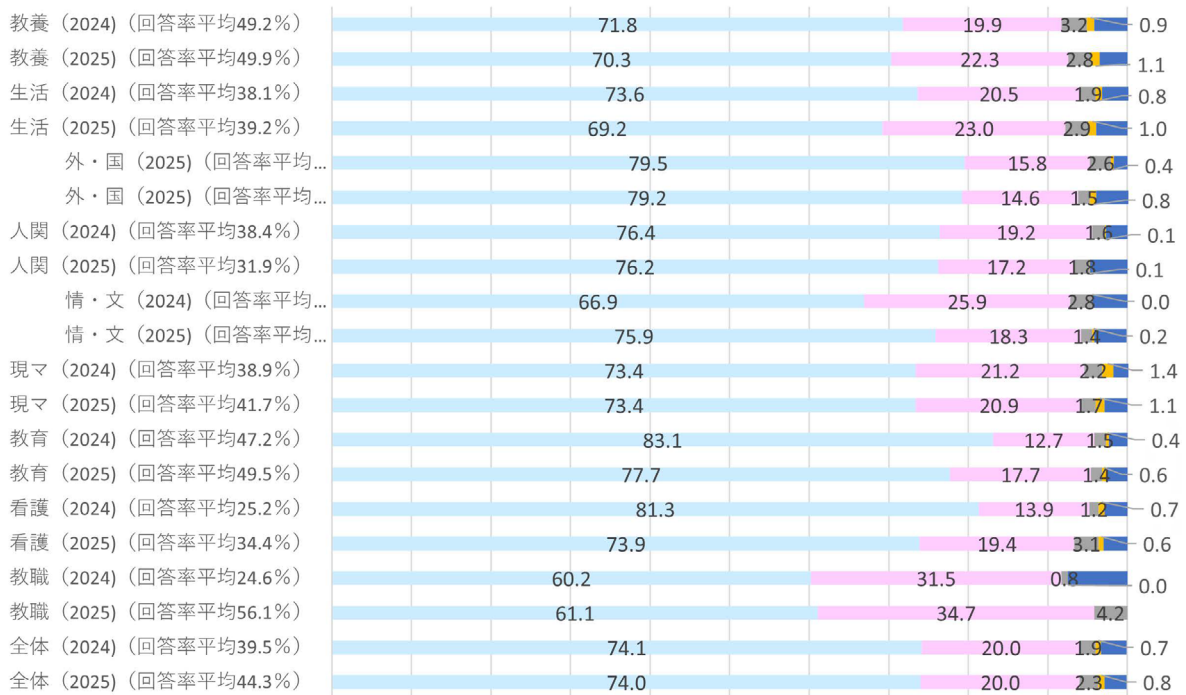
現マ＝現代マネジメント学部

教育＝教育学部

看護＝看護学部

※2023年度から、教養教育科目は、開講学部によらず、すべて「教養教育科目」区分で集計。

総合充実度（全体）



※回答率平均

：全回答者数/全受講者数

■ そのとおりである

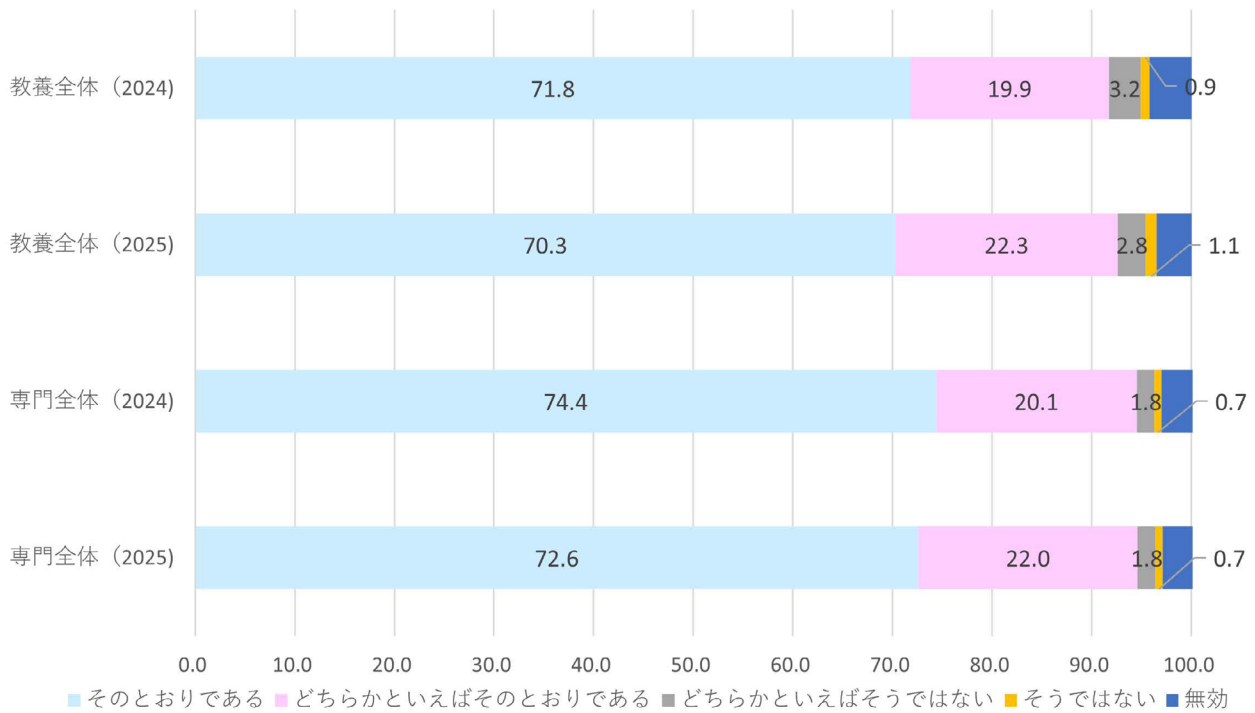
■ どちらかといえばそうではない

■ 無効

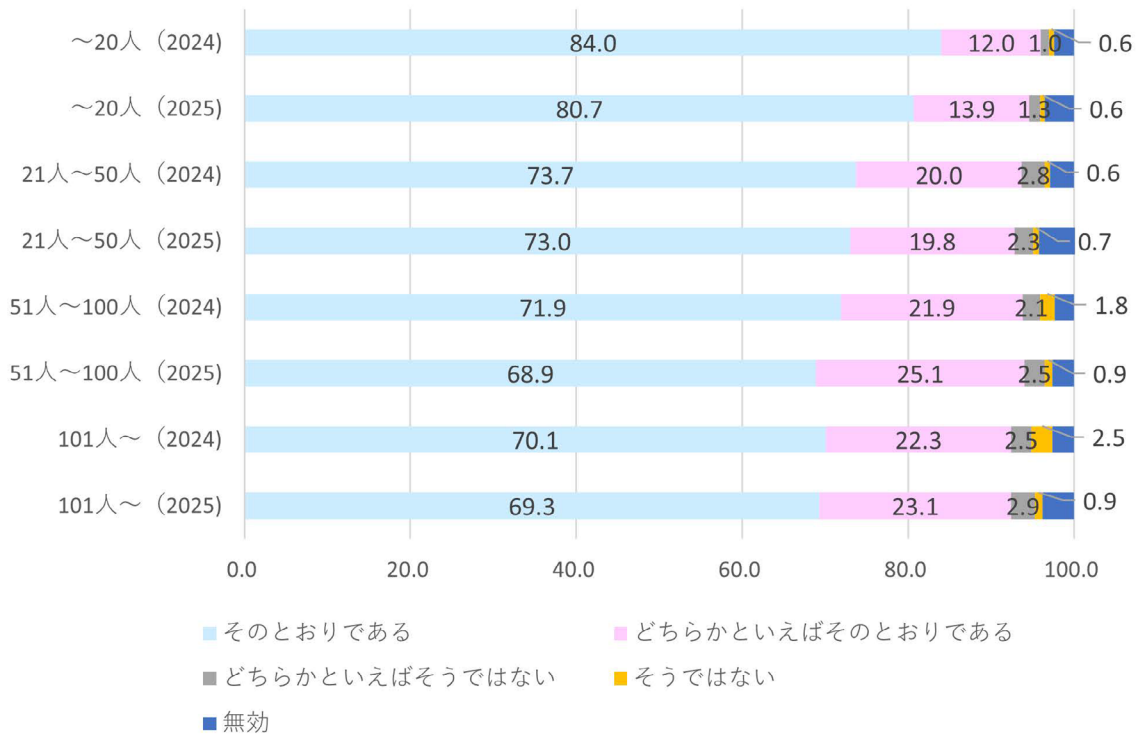
■ どちらかといえばそのとおりである

■ そうではない

総合充実度（教養・専門別）



総合充実度（受講者数別）



1. FD研修会

- ・日時：2025年9月3日（水）～9日（火）
- ・場所：オンライン開催（オンデマンド）
- ・テーマ：羅針盤と道筋によるライフ・デザインの考え方 Sugi-PORT の効果的な利活用の試み
- ・講師：情報社会学部 栗本 英和 教授
- ・参加者数

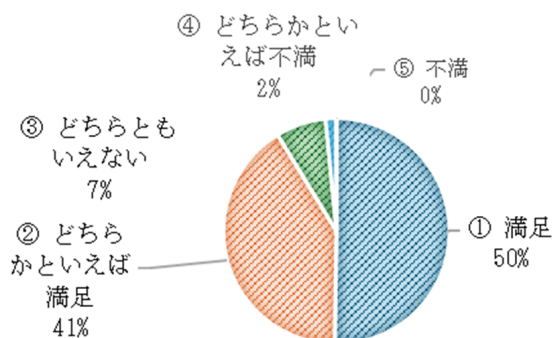
	生活	外語	人関	情社	現マネ	教育	看護	計
参加数	29	26	26	27	26	31	30	195
参加率	96.7%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	99.5%

その他：生活助手10、看護助手13、事務12 合計230名

《アンケート集計結果》

Q. 今回の研修会について全体としての満足度をお答えください（助手その他を除く）

①満足	②どちらかといえば満足	③どちらともいえない	④どちらかといえば不満	⑤不満
98	80	14	3	0



2. 新任教員研修（学外）

- ・内容：公益財団法人大学コンソーシアム京都主催「FD合同研修プログラム・テーマ別研修」
- ・参加者：外国語学部1名、人間関係学部2名、現代マネジメント学部1名、教育学部1名

プログラム等	開催日時	参加人数
【動画配信】FDの基礎知識	2025年9月9日（火） ～2026年3月末	2名
第2回 科研費獲得のための申請書作成術 ～コツと戦略を学ぶ～	2025年7月2日（水） 18:30～20:30	3名

3 学部FD活動報告

- 3 - 1 生活科学部
- 3 - 2 外国語学部
- 3 - 3 人間関係学部
- 3 - 4 情報社会学部
- 3 - 5 現代マネジメント学部
- 3 - 6 教育学部
- 3 - 7 看護学部

生活科学部FD委員

(管理栄養学科) 及川佐枝子、門屋 亨介

(生活環境デザイン学科) 井澤 幸、川野 紀江

(学部長・オブザーバー) 藏澄 美仁

【1】活動計画（本年度の活動内容および活動目標）

- ①全学で実施される前期および後期授業アンケートの学生からの回答率を高め、全教員にリフレクションペーパーの記載を依頼する。授業アンケートの結果を基に、全教員がリフレクションペーパーの記載を通し、授業内容の改善を図る。
- ②1・3年生のコンピテンシーテスト（GPS-Academic）の結果分析を学科ごとにベネッセから報告してもらい、注目すべき点などのレクチャーを受ける。コンピテンシーテストの結果を学部・学科内で共有し、個々の授業内容の改善やカリキュラムの改定に活用する。
- ③Sugi-PORT を活用し、1・3年の学生との個人面談の結果から、学生の学修成果や課題を抽出する（2、4年生は希望者のみ面談実施）。学生の学修状況から抽出された課題を学部・学科内で共有し、教育活動の改善につなげる。
- ④学科ごとに、教員（学科主任・FD委員他3名程度）と学生（成績優秀者10名程度を予定）との懇談会を実施する。授業内容やカリキュラム等について、意見収集することを目的とする。懇談会で出された意見を基に、個々の授業の課題やカリキュラム上の問題点を把握し、学科内で共有する。さらに、個々の授業内容の改善やカリキュラムの改定の際に活用する。

【2】FD活動の実施報告

①委員会の開催

委員会は2025年4月～2026年3月の間、主にメール会議にて適宜実施した。協議事項は、FD活動計画、活動目標の達成度および授業評価の見直しである。

<協議事項>

- ・学部FD活動計画を確認。
- ・昨年と同様に授業アンケートはwebで実施。実施要領とリフレクションを確認。

②2025年度に企画・実施されたFD活動

- ・4,9月 授業課題が大変であるという学生からの指摘を受け、課題の提出時期を一覧にまとめて、教員間でも調整を図ったうえで、学期ごとに学生に公表した（生活環境デザイン学科）。
- ・4月 1年生を対象にコンピテンシーテストを実施した。実施率は、管理栄養学科100%、生活環境デザイン学科100%であった。
- ・4月 教員の教育技法の改善につなげるため、国家試験に精通したプロフェッショナルによる国家試験受験のための心構え、および模擬授業を実施（管理栄養学科）。
- ・5月 1年生を対象にコンピテンシーテストの結果活用ガイダンスをゼミごとに実施した。参加率は、管理栄養学科100%、生活環境デザイン学科93.4%であった。欠席者には個別に結果を配布した。
- ・6月 1-3年生を対象としたOG懇談会開催した。社会人として活躍している本学卒業生と学生の交流を通して、教員の教育技法の改善につなげた。併せて学生は就職を中心に、将来の方向性の決定に役立てることで教育環境の整備につながった（管理栄養学科）。
- ・6月 ベネッセによる1年生のコンピテンシーテスト集計結果に関する教員向けの結果概要説明会を開催した。参加率は、管理栄養学科85.7%、生活環境デザイン学科100%であった。その後、生活・学

習指導教員が個別面談を行った。(管理栄養学科・生活環境デザイン学科)。

- ・7月 前期授業アンケート実施(全学)
- ・9月 FD研修会(全学)
- ・9-10月 3年生を対象にコンピテンシーテストを実施した。管理栄養学科はクラスごとで実施し、実施率は100%であった。生活環境デザイン学科はゼミごとで実施し、実施率は99.3%(過年度生を2名を除く)であった。
- ・10-11月 3年生を対象に、ゼミごとにコンピテンシーテストの結果活用ガイダンスを実施した(管理栄養学科・生活環境デザイン学科)。
- ・10-1月 3年生を対象に、ゼミごとにコンピテンシーテストの結果を踏まえた個人面談を、SugiPORTを活用して実施した(休学者を除く)(管理栄養学科・生活環境デザイン学科)。
- ・11月 ベネッセによる3年生のコンピテンシーテスト集計結果に関する教員向けの結果概要説明会を開催した。参加率は、管理栄養学科は約70%、生活環境デザイン学科は81.3%であった。その後、学修・生活指導教員が個別面談を行った(管理栄養学科・生活環境デザイン学科)。
- ・11月 各分野3名合計9名の成績優秀学生を対象に、学生ヒアリングを実施した。(生活環境デザイン学科)
- ・11月 2、3、4年生の各3名の代表者(合計9名)に対して学生ヒアリングを実施した。(管理栄養学科)
- ・12月~2026年1月 後期授業アンケート実施(全学)
- ・2月~3月 「今年度の振り返り」と「来年度の目標アンケート」の実施(全学)
- ・2月~3月 2025年度外部評価結果に係る報告会(全学)
- ・3月 卒業式当日に、「卒業時学修行動・満足度調査」(全学)を行い、その結果を次年度の学科運営に活用する資料として、今後、学科内で共有することとした(管理栄養学科・生活環境デザイン学科)。

【3】活動計画の検証(評価点および課題点)

活動計画①については、学生に実施した授業アンケートの実施率は、前期は90.8%(昨年93.3%)、全学83.7%、後期は82.6%(昨年82.1%)、全学78.3%であり、本学部の実施率は全学よりはやや高く、昨年度とは同程度であった。後期のアンケート実施期間の見直しが行われたものの、実施率の点では効果がありみられない。具体的な「授業アンケート」の設問のうち、専門教育における総合充実度は、「どちらかといえばそうである」以上の肯定意見が学部全体として前期93.0%(昨年91.4%)、後期92.2%(昨年94.1%)で昨年と同程度であった。しかし、肯定意見の回答率が低い授業もみられるため、今後も教員の個人あるいはグループ単位で更なる改良を試みる事が求められる。学生のアンケート回答率に関しては低い傾向であり、学生に対して各教員からも強めにアンケート実施の呼びかけを行っているが、Webでの実施であることから学生任せになるため、入力を忘れてたり送信ミス等でカウントされなかったりしたことも考えられる。Webでのアンケートではなく、以前行っていたような授業時間内に対面で回答紙を用いて行う、回答しやすいように質問項目を減らすなど、全学的にも回答率を高める工夫を検討する必要があると考えられる。

また、教員のリフレクションペーパーの提出率は、前期69.7%(昨年78.4%)、後期83.2%(昨年72.9%)であり、前期は昨年度を下回ったものの、後期は委員からもリマインドを行うことで実施率が向上している。

活動計画②については、6月/1年生、11月/3年生のコンピテンシーテスト(GPS-Academic)の結果分析を学科ごとにベネッセから報告を受けた。コンピテンシーテストの結果を学部・学科内で共有し、個々の授業内容の改善やカリキュラムの改定に活用していく。

活動計画③については、新入生および3年生を対象に実施したコンピテンシーテストの結果を基に、ベネッセからの情報提供(上記②)を参考に、両学科ともに個人面談を行った。昨年度から全学でSugi-

PORTが導入され、本テストの結果もSugi-PORTのシステムに組み込まれたため、Sugi-PORTを使用した面談を行った。Sugi-PORTと連動したことにより、成績と「態度・姿勢」等の可視化しづらい部分を一体で指導できるようになっている。2023年度に、新たに学修成果に関する学科独自のアンケートをコンピテンシーテストに追加したため、本年度は1年次から3年次にかけての学修成果について確認することができ、指導が効果的に行われた。また活動計画③では、1年生、3年生を対象に、昨年度から導入されたSugi-PORTを活用し個人面談を行った。学生一人ひとりに面談を行った結果、学生の学修状況の傾向をある程度確認することができた。また、面談時には長期目標の記入も促した。面談は教員にとって負担にはなるが、個々の状況が把握できれば、学部・学科内で学生の状況を共有し、授業内容の改善やカリキュラムの改定、要支援学生（予備軍含む）への適切な指導に活用することができる。適切に運用することで、今後の教育活動の改善につなげていくことが可能となる。

活動計画④については、学科毎に学生ヒアリングを実施した。授業内容やカリキュラム等について、学生から意見収集を行い、個々の授業の課題やカリキュラム上の問題点等を把握、学科内で共有し、改善が必要な点については検討を行った。さらに、カリキュラムの改定の際にも活用していく。

【4】次年度へ向けた計画

- FD活動を積極的に推進し、意義あるものにするために、今年度の活動計画の実施における反省から、
- ①学生による授業アンケート回答率を上げるため、より強く声かけが必要であろう。また、授業アンケートに対する教員のリフレクションペーパーについても、引き続き全員提出をめざし、これまで以上に声かけが必要であろう。
 - ②昨年度から開始されたコンピテンシーテストを活用した学生との個人面談は、Sugi-PORTの導入により可視化も可能になった。コンピテンシーテストの結果から、1年次から3年次にかけて経時的に学修成果を確認していくが、それをどのように活用していくのか、学部・学科において将来構想委員等を交えて引き続き議論する必要があると考える。
 - ③昨年度より導入されたSugi-PORTにより個人面談が実施されたが、Sugi-PORTの使用法や利点について、学生があまり理解できていなかったため、十分な説明をする必要がある。今後は、より効果的な活用方法を検討し、教育活動の改善に繋げていく。そのためには、面談終了後に結果を教員間で共有し、課題等を確認する機会をあらかじめ設けておく必要がある。
 - ④各学科で実施した学生ヒアリングは、学生からの生の声を聴く、非常に有効な機会であった。学生の意見を参考に、各学科で課題を確認・共有化し、改善すべきことは改善に努めていく必要がある。また、学生ヒアリングは、継続して実施していくことも重要である。

結論として、FD活動の活性化を促すために、学生による授業アンケートおよび、教員のリフレクションペーパーの回答率を上げる工夫をすること、Sugi-PORTを有効に教育活動に活用できるよう教員からの提案を促し、効果的な活用方法を共有し取り入れること、さらに学生ヒアリングを継続して実施し、課題の共有化・改善策の検討を行っていくことが重要と考える。

【1】活動計画（目標）

昨年度、外国語学部が発足し、その前後に教員の異動も多かったことから、学部内において、教員相互の研究内容に関する理解が十分でないこと、授業の質向上に資する教育実践の共有が不十分であること、さらに親睦の機会への参加率が高いとはいえないことなどが課題として認識されていた。

これらの状況を改善するため、本年度は、教員間のコミュニケーションを促進し、相互理解を深めることで、それを授業及び研究の質向上につなげることを目標として、学部教員の相互交流の活性化をFD活動の重点項目に位置づけた。具体的には、学部所属教員が各自の研究又は教育実践について簡潔な話題提供を行い、質疑応答を含めた意見交換の機会を設けることとした。

【2】教員FD交流会の概要**1. 開催目的と実施方法**

教員相互の交流促進を目的として、「教員FD交流会」を実施した。開催時刻については、比較的参加しやすい時間帯として、教授会終了後又は月第4火曜日午後3時からを基本とした。各回においては2～3名が発表を担当し、質疑応答を含めて1人当たり20～30分程度、全体で1時間程度を目安として運営した。

もっとも、月第4火曜日には委員会その他の予定を有する教員もおり、外国人教員については同時間帯に授業を担当している場合もあった。また、通院や家庭の事情等により途中退席を余儀なくされる場合も想定されたため、参加人数については全体の3分の2以上を一応の目安とした。実際には、この目標はおおむね達成された。

第1回は7月8日の教授会終了後に実施し、その後、7月22日、9月9日、9月23日、10月14日、10月28日、11月11日、11月25日、12月9日と継続して開催した。夏季休業期間を挟みつつ、約5か月にわたり合計10回の交流会を実施したことになる。その結果、他大学への転出が決まっていたため参加を辞退された教員1名を除き、専任教員24名全員が発表を行った。

2. 交流会の内容

各教員の発表内容は、大別すると、自身の研究・専門性に関するものと、授業実践・教育活動に関するものとに分類することができる。ただし、外国人教員の中には英語教育法そのものを専門とする者もあり、両者の区別が必ずしも明確でない場合も少なくなかった。また、授業内容の紹介を主とする発表についても、それが専門テーマの紹介であるのか、教育実践の報告であるのかを明確に区別することが難しい事例がみられた。

その点を踏まえつつ、便宜的に分類すれば、24名中13名が自身の専門に関連する話題提供を行い、残る11名が主として教育活動又は授業実践に関する内容を扱った。専門に関する発表といっても、非専門家を対象とする15分程度の短時間の発表であるため、高度に専門的な研究内容を詳細に紹介する形式よりも、各自の専門分野に関連する話題を平易に示す内容が中心であった。他方で、国際学会における最近の発表内容を紹介するものや、出版予定の著作・論文の内容に触れるものなど、各教員の専門性の一端をうかがわせる発表もみられた。また、授業紹介を中心とした発表の中には、学生の間で話題になっていることは把握していたものの、今回初めて具体的な内容を共有できた事例もあった。

【3】交流会の成果と課題

3.1 授業改善

発表内容の中には、文字情報の視覚化という観点から授業用スライドの改善を提案するもの、MBA取得後の知見を踏まえて、ビジネススクールにおけるケーススタディ方式を授業に導入する試みを紹介するもの、語学教育におけるAI活用の具体例を示すものなどがあつた。いずれも授業改善に資する示唆を含むものであり、学部内で教育実践を共有することの有効性を確認する機会となつた。

また、本学部では語学教育にAIを活用する体制の整備を進めつつあるが、その具体的な実践の一端を共有できたことも、本交流会の成果の一つであつた。

3.2 研究成果の共有

本交流会は、教員相互が専門分野に関する知見を共有し、相互理解を深める場としても有効に機能した。たとえば、本年度で定年退職を迎える教員からは、美食とガストロノミーの概念の差異、染色型紙がアールデコ及びヨーロッパの装飾美術に与えた影響等を具体例としながら、文化における美の概念や美術館の役割に対する解釈の相違がわかりやすく紹介された。

さらに重要であつたのは、複数の教員の間で今後の対話や連携につながり得るテーマが複数提示されたことである。たとえば、ヘイトスピーチの定義と規制を素材として、米国と欧州における言論の自由観の相違に触れた発表、第二言語習得に関する発表、さらに「証言」をめぐってノンフィクション的要素とフィクション的要素それぞれの有効性及び両者の関係性を考察した発表などは、言語や表現に関心を共有する本学部教員にとって共通の関心領域となり得るものであつた。これらは、今後、学部として研究成果を対外的に発信する講座やフォーラム等を企画するうえでも示唆を与える内容であつた。

3.3 交流会を通して明らかになつた課題

外国語学部では、発足以来、キャリア関連科目の充実を図るとともに、社会連携プロジェクトと連動したPBL (Project-Based Learning) 型授業を複数設置している。しかしながら、今回の交流会において、自身の社会連携プロジェクトについて具体的に報告した教員は1名にとどまつた。この点は、キャリア関連科目群の一層の充実に向けた議論を深めるという観点からみれば、今後の課題として残されたといえる。

また、運営上の最大の課題は、教員全員が参加しやすい時間帯を確保することであつた。とりわけ外国人教員は火曜日午後にも授業を担当していることが多く、途中参加となる例も少なくなかつた。そのため、全員が同一条件のもとで参加できる体制を十分に整えることは困難であつた。

加えて、1回1時間、3名程度が発表する形式では、質疑応答を含めても1人当たり20分程度にとどまり、交流を深めるための時間としては必ずしも十分とはいへなかつた。教員がいずれも多忙であることから、終了後に懇談の時間を延長して設けることも難しく、多くの場合は終了後そのまま解散する形となつた。

もっとも、各教員が現在どのような研究及び教育実践に取り組んでいるのかが把握しにくい状況を改善し、相互理解の基盤を形成できたことは、本年度のFD活動の大きな成果であつたと評価できる。

【4】次年度に向けた計画

今年度の取組を通じて、今後のFD活動に発展させ得るいくつかの方向性が明らかになつた。具体的には、各教員の授業実践の共有を通じた授業改善、共通テーマのもとで複数教員が議論を行うフォーラム型企画の実施、さらに学部の研究成果の対外的発信などが挙げられる。

これらについては、分科会形式で展開することも考えられるほか、既存の「地球市民講座」等の対外発信の機会と連動させることも可能である。今後は、こうした可能性を具体的に検討しつつ、学部の研究及び教育の活性化に資するFD活動計画を策定していきたい。

2025年度、人間関係学部では以下の目標を定め、両学科とも4回（うち2回は2学科共通）にわたって研修や意見交換をおこなった。

- ・ Sugi-PORTを用いた学生指導について、さらなる改善を図る。
- ・ GPS-Academicを用いた学生指導について各教員のスキル向上を目指す。
- ・ 「ファーストイヤーゼミ」「基礎演習A・B」について、各担当教員の指導実践を共有し、指導方針について意思統一を図る（人間共生学科のみ）。

心理学科FD意見交換会

第1回は本会の趣旨について説明、第2回はテーマについて自由に意見・感想等を出し合う、第3回はGPS-Academicの結果について、外部講師（ベネッセiキャリア）からの説明と質疑応答、第4回はそれを踏まえた意見交換という趣旨で開催した。第3～4回はオンラインで開催し、当日欠席者には録画を配布して追加意見も募った。

開催日（第3・4回は人間共生学科と合同開催）

第1回 10/7（火）学科会議後：意見交換会の趣旨説明（参加者13名）

第2回 11/4（火）学科会議後：意見交換会（参加者13名）

第3回 1/28（水）10:30～11:30：ベネッセiキャリア担当者によるGPS-Academic結果説明会（オンライン、参加者：両学科あわせて15名）

第4回 1/28（水）11:30～12:00：説明会を受けての意見交換会（オンライン、参加者：両学科あわせて15名）

第2回の意見概要

- ・ 長期目標、短期目標の入力について

1年生は特に入力方法の習得に終始しており、長期目標の作成までいたっていないことが多い。また前期、後期ごとの目標入力も、「遅刻しないようにする」「欠席しないようにする」といった内容も多く、長期目標に向けた短期目標の作成にいたっていないことが多い。従って、教員が一つ一つ目標の作り方から指導することも多い。

- ・ Sugi-PORTに関する説明資料の活用について

説明資料が3～4月に配布されてはいる。しかし、学生にとっては4年間に応じた長期目標をふまえ、自己理解を行いながら各学年の短期目標を設定することは難易度が高いように思われる。従って教員の方から、面談の際に、Sugi-PORTを利用する意味を含めて、面談時に説明している。

- ・ 実施時期の適切さについて

面談の実施時期は、現在の設定が適切と思われる。1年生は、9月下旬より面談開始することで、1年前期の状況を確認でき、後期に向けて入力方法含めてサポートしやすい。Sugi-PORTを通じて学生生活をサポートできる機会になっている。

・実施学年の適切さについて

現在の1、3年生を中心とする実施が適切であると思われる。4年生は卒業研究に時間を多く要することから、面談のニーズよりも卒論指導の方がニーズが高い、現在のSugi-PORT上のコメント入力を引き続き促し、随時対応していく現在の方法が指導しやすい。

・GPS-Academicの反映について

GPS-Academicの入力対応時期含め、すべての情報がSugi-PORTに常に集約されているわけではない。もし入力反映の問題もあるなら、Sugi-PORT面接を11月中旬以降にずらすか、3年生は1年生と同じ春季に実施する必要がある。一方で、連絡がスムーズでない学生の対応を含めると、現状の体制のほうがよいかもしれない。

・他の学生対応支援との統合・整理について

同時期に学生の単位取得や要支援に関する指導・連絡が行われている。これらの他の学生面談等の支援とSugi-PORT面談の体制が整理されると、よりSugi-PORTを活用でき、適切な学生支援がしやすくなると思われる。

・ほか、デバイス、使用方法に関する要望

学生情報を閲覧する画面は、同時に各情報を確認することができず、見にくい。また、携帯でもPCのいずれでも目標の追加・修正方法がわかりにくい。操作方法がわからない学生も多い。それらの学生には、目標や各ふりかえりについて学生の画面を教員が直接的に入力対応していく必要性が現在生じている。

またGoogle Classroomのように本画面から学生に連絡する機能もほしい。現在は、別途メールやS*mapでの連絡を行う必要がある。他の学生支援システムのように、全ての情報集約が一つのシステムで整理された方が学生、教員ともに使いやすいと思われる。

第3・4回の概要

第3回（講演）の要約

<1年生>

- ・思考力総合は両学科とも上昇傾向にある
- ・経験は、共生学科では上昇傾向にあるが、心理学科は過年度と同程度
- ・経験の自己管理や計画実行は、多層化が広がっている
- ・両学科とも学ぶ内容に魅力を感じて入学してきている。心理学科は資格取得のための学びに対する期待も大きい
- ・両学科とも楽に単位を取りたいという思考は減少している（＝学ぶ意欲が高い）
- ・両学科とも第二志望での入学者層が増えている

<3年生>

- ・思考力総合は両学科とも上昇傾向にある
- ・姿勢・態度も良化している
- ・経験の対人関係・計画実行は多層化が広がっている
- ・両学科とも大学・学部学科への納得度・おすすめ度は高まっている（＝満足度が高まっている）
- ・退学を検討している学生0を達成している
- ・就職に向けた準備の意識が高まっており、自身の強みや特徴を把握できていると考えている学生の割合が増えている

質疑応答

- ・多層化が進んでいることについて
→全国的な傾向、多様な特性をもった学生に合わせた対応が必要
- ・学生面談への活用について
→自分の特性を知る、強みを伸ばすという伝え方が望ましい
- ・入試の多様化と対応しているのか／学部の特徴が反映されているか
→入試方式ごとの分析が可能、学部系統ごとの比較や学内の他学部との比較
- ・他大学と比べた特徴、女子大の特徴はみられるか
→本学の学生の特徴や傾向はサマリーでもある程度示されたとおり。さらに詳細な分析も可能。共学と女子大の全国的な比較も可能。
- ・思考力の分布が二層化している点について
→1年生から3年生の分布の変化をみると、一部の層が上昇した結果であると推測される

第4回（意見交換会）の概要

- ・学生への指導の方針については、質疑応答にあったように強みを伸ばすという方向性を重視
- ・強み（弱み）の要因を面談を通じて分析する
- ・面談にあたって学生面談カルテを準備してほしい
- ・入試方式ごとの結果や学部系統ごとの結果は教授会でも共有されているので、適宜参照していきたい
- ・DP／CPと科目・カリキュラムの関連性を整理しておく必要がある。共生学科では各教員のケース・演習を4象限に分類・整理している
- ・来年度から所用時間が短くなるので、試験の前に解説や趣旨説明をおこなうなどの時間の活用を考える

人間共生学科FD意見交換会

第1回は本会の趣旨について説明、第2回はテーマについて自由に意見・感想等を出し合う、第3回はGPS-Academicの結果について、外部講師（ベネッセiキャリア）からの説明と質疑応答、第4回はそれを踏まえた意見交換という趣旨で開催した。第3～4回はオンラインで開催し、当日欠席者には録画を配布して追加意見も募った。

開催日（第3・4回は心理学科と合同開催）

- 第1回 10/7（火）学科会議後：意見交換会の趣旨説明（参加者13名）
- 第2回 11/4（火）学科会議後：意見交換会（参加者13名）
- 第3回 1/28（水）10:30～11:30：ベネッセiキャリア担当者によるGPS-Academic結果説明会（オンライン、参加者：両学科あわせて15名）
- 第4回 1/28（水）11:30～12:00：説明会を受けての意見交換会（オンライン、参加者：両学科あわせて15名）

第2回（意見交換会）の概要

＜ファーストイヤー・基礎演習の指導方針・指導内容について＞

- ・各教員が用いている参考文献の情報について共有を進める
- ・半期で完結するのではなく、基礎演習A→B→卒論というステップを意識
- ・24カリに対応した指導内容
- ・卒論ゼミ選択のための個人面談と基礎演習とをうまく連動させる

< GPS-academic・Sugi-PORTの利用について >

- ・ 教員にとって学生と話すきっかけとなっており、学生にとって面談の練習にもなっているという点で、有益な機会にはなっている
- ・ 面談を通じて社会に対する志向性・態度についての話を聞くことができた
- ・ GPS-academicのワークシートの発展的な活用として、本人が記入するだけでなく、学生同士の意見交換にも用いた
- ・ Sugi-PORTの活用例として、社会福祉コースでは訪問実習の記録をまとめるのに用いている。詳細な記録で、社会福祉担当以外の教員にも学生の状況把握の参考になっている
- ・ Sugi-PORTの記録自体が学生生活の振り返り、就職活動のための資料として活用できる
- ・ 一方で、どのように活用していいのか、効果的に活用できているのかといった不安も一部にはある。学生の側も、指示されたから書いている（書かされている）という意識がある者もいる。このような意識を改善していくことが課題

第3・4回は心理学科と合同のため割愛

総括

4回の取り組みを通じて有意義な意見交換ができ、目標に掲げた内容を達成することができた。第3回では、GPS-academicの結果に関する外部講師の説明を聞くことで、学生の傾向や特性をより深く把握することができた。また、第4回の意見交換会では、GPS-Academicを用いた効果的な学生指導に向けた議論ができた。以上を通じて、GPS-AcademicおよびSugi-PORTを用いた学生指導についての教員のスキル向上が図られた。次年度のFD活動では、今年度の意見交換会で出された意見を反映して、さらなる研修を重ねることで各教員のスキル向上につなげたい。

情報社会学部FD委員

栗本英和・樋口謙一郎

【1】活動報告

情報社会学部は2024年4月に開設された、情報デザイン学科と現代社会学科からなる新学部であり現在、設置審下にある。昨年度に続いて、前任校で認証評価や法人評価の業務に就いていた栗本英和教授に話題提供を依頼した。主題は、Part Iとして高等教育施策（とくに、第4巡目の認証評価の見直しの観点を含めて）、Part IIとして内部質保証システムの実質化、Part IIIとして話題提供のまとめに代えた、参加者への問いかけとして2つのResearch Questionが提起された。

日 時：2025年12月09日（火）15:30～17:00

話題提供：栗本英和（情報デザイン学科専任教授，名古屋大学名誉教授）

題 目：内部質保証に関する国の施策と認証評価の動向

実施方法：対面

対 象：情報社会学部教員

【2】提供主題

Part I：高等教育施策と（第4巡目の）認証評価の見直し

- ①知の総和（答申）に伴う第4巡目の認証評価制度の見直し
- ②愛知県私大教務研究会における2つの認証評価機関による講演会の概要
- ③「質」には正解がない、あっても1つではない Quality Journey

Part II：内部質保証システムの実質化

- ①質（Quality）とはなにか？
- ②質の保証（Quality Assurance）とは何か？
- ③高等教育の質と自己点検・評価（Self-Assessment）
- ④教育学修の内部質保証システムの要件

Part III：まとめ－Research Questionその1及びその2

- ①新学部・新学科の学修成果をどう測定しますか？
- ②何を測定すれば、適切でしょうか？
- ③そのための前提となる要件や取組は何でしょうか？
- ④情報デザイン学科や現代社会学科の他大学と比した特長、特色、独自性は何でしょうか？

【3】まとめ

前年度に引き続いて高所大所の観点から、教育学修現場の課題が体系的に整理された話題提供であった。学部学科の設置完成時だけでなく、第4巡目の認証評価への備えとしても、Part I及びIIから、「教育の質を確保するための体制や仕組みを実質化する意味が理解できた。」Research Questionその1からは「質を的確に測定する、可視化する必要性がわかった。」や「質を確保しているEvidenceを示す重要性がわかった。」という意見が、Research Questionその2からは「志願する受験生や採用する社会から観た、学部や学科と特長や特色につながる独自能力の大切さがわかった。」の意見が寄せられた。

また、配布資料から情報デザイン学科のDPと、他大学の同一名称学科のDPと比較することで、「他大学では学力の3要素以外の独自の、特色ある資質・能力をDPに設定していることに気づいた。」という

言葉も聞かれた。新学部である情報社会学部だけの現象なのか、学内の他学部・他学科でも同様な状況なのかを点検・確認することも示唆された話題提供であった。

研修資料 (抜粋その1)

Sugiyama 20251209 1

情報社会学部 F D

内部質保証に関する国の施策と認証評価の動向 (趣旨)

事実前提から価値前提へ、視座の転換を考えてみる

2024年度 Part 0 : 認証評価結果からの懸念
Part I : 教育の質とは何か?
① 論点整理
② PDCA Management Cycle
③ Total Quality Management
④ 内部質保証システム
Part II : Sugi-PORTに関する対応事例

2025年度 Part 0 : Sugi-PORTの入り態形の作成
Part I : 高等教育施策と認証評価の見直し
学部や学科の対応準備
Part II : 内部質保証システムの実質化
教育の質 (前回の復習)
学部学科の学修成果を測定方法
特長と特色ある教育プログラム

話題提供 栗本英和 (名古屋大学名誉教授)

Copyright©2025 KURIMOTO, H

2

Part I

高等教育施策と認証評価の見直し

愛知県私立大教務研究会主催 (20251203) の講演会「第4巡目からの認証評価の新基準」より

3

Part I : 知の総和 (答申) に伴う以下の認証評価制度見直しの方向性

新たな高等教育の質保証・向上システムの構築に向けて (中教審)

論点整理

- 機関別でなく、学部研究科に応じた定性的評価 (分野別評価?)
- 教育研究情報に基づく定量的評価 (全国学生調査?)
- 教育の質の段階的評価 (優劣) の公表と撤退
- 学位プログラムを軸にした評価可能な新たな仕組みも?

特色と魅力ある教育プログラム

4

Part I : 愛知県私立大教務研究会開催の趣旨と目的

■ 趣旨

- 認証評価の中核は教育の質。しかし、教務系職員にとっては時に、**違らされ感を伴う業務**でもあり、認証評価の真の目的や意義を認識したい。

■ 目的 (主題)

- 高等教育の現場を支える、**実務者のための集会**にしたい。
- 私立大学が共通する関心事、**第4巡目の認証評価の方針を基軸**にする。
- 評価機関、受審校ともに**世代交代が起こっており、業務知の継承**にする。
- 評価する/されるから、**越境型のコミュニティの意見交換の場**にする。
- **第4巡目の重点項目、注意点、留意点**を中心にする。
- **評価機関の特長や特色**を含めた話題提供から、**国の方向性を共有**する。
- **可能なら知の総和(答申)に伴う認証評価制度見直し**の課題を共有する。

Copyright©2025 KURIMOTO, H

研修資料 (抜粋その2)

5

Part I : 2つの認証評価機関へ事前をお願いした事項

■ 第4巡目と第3巡目との変更点, 重要点, 留意点など

- できれば、今年度の実施校の事例を含めて欲しいという要望
- 現場を担う職員にとって肝になる事項

■ 改組や募集停止の学部・学科, 新設の学部・学科の対応

■ 評価機関としての特長や特色の紹介

- 大学基準協会: 学生やステークホルダーを内部質保証システムに包含
- 高等教育評価機構: 教育から教育研究に変更/不祥事の法令対応

■ 可能であれば認証評価制度の見直しに対する考え方や方針

- 学部ごとの分野別評価, 段階別判定, 撤退勧告, 負担軽減

Copyright©2025 KURIMOTO, H

6

Part I : 愛知県内の私立大学が受審する認証評価機関の重点

第4巡目機関認証評価の懸念と内部質保証の実質化

愛知県私立大教務研究会

Copyright©2025 KURIMOTO, H

7

Part I : 『質』は正解がない、あっても1つでない~Quality Journey

今後の行方 (論点整理)

- 質保証のさらなる実質化
- 機関別でなく、学部研究科に応じた定性的評価 → 分野別評価?
- 教育研究情報に基づく定量的評価 → 全国学生調査?
- 教育の質の段階的評価 (優劣) の公表と撤退示唆

教育の質 (Quality) とは何か? 質の国、その発祥は made in 愛知 / Japan as No.1 に立ち戻って考案してみる

Copyright©2025 KURIMOTO, H

8

愛知県私立大教務研究会・講演会のクロージングとして、

県内私立大学の特長や特色ある取組によって、**県外に流出した進学者に愛知の善さを知ってもらい、全国から志願者が愛知に集まるよう、頑張りませんか。**

質の国の源泉、愛知!

9

Part II 内部質保証システムの実質化

内部質保証システムの要件

参照モデル: Plan (Design) → Do → Check → Actによる質向上の仕組み

- ① 仕組 (体制) がある。例, 組織図, 責任者の所在
- ② それが機能している。例, Evidence (根拠) / Outcomes (成果)
- ③ 学外者に頼らず, 学内者の自発的かつ自律的な仕組仕組
- ④ 上記を実現する持続可能な学術文化 (Eco System) の醸成

ある県立大学における教員向け全学FD (2020.11.18)

10

教育研究に携わる教員の目線による概念整理

- 質とは何か? Qualityの特徴
- 質保証とは何か? Quality Assuranceの意味
- 質保証システムとは何か? Quality Assurance/Management Systemsの仕組

内部質保証システムの中核となる, Facultyである教員の責務

- ① 厳格性と客観性ある成績評価のSelf-Assessment
- ② シラバスに副ったコース・マネジメントのAssessment
- ③ 単位の実質化 (Study Load) を確保するための指示

Copyright©2010, 2017, 2020 KURIMOTOH, Nagoya University

11

質 (Quality) とは何か?

■ 日常会話の中で「質が良い/悪い」という表現をする。したがって、質には「程度」、「度合」という概念がある。

例えば、基準となる「物差」として、

- ・ 「長さ」: mの単位で表現できる
- ・ 「重さ」: kgの単位で表現できる
- ・ 「質」: 程度を表すが、単位がない!

医療, 教育, 行政, サービス, 製品, 研究開発等

■ 質は、「他の何か」と組み合わせることで基準を得る。

- (1) 利用者である関係者の「要求」に対する基準で、
- (2) 様々な要求や期待に対して、総合的に良いのか悪いのかを示す度合いである。例, バラツキ, 水準
- (3) 質には「要求に関連する要素」が含まれる。 (私用劣化・変質する。例, 「機能性」, 「利便性」, 「耐久性」, 「満足度」など

Copyright©2010, 2017, 2020 KURIMOTOH, Nagoya University

12

質の保証 (Quality Assurance) とは何か?

Assureの言葉がもつ概念

○ Assure : 相手の懸念や疑念を取り除く。
例, 確保する。約束する。実証する。請け合う。
(相手を安心させるという意味を含む概念)

× Guarantee : 保証する。
例, 担保する。確約する。請け合う。

× Insure : 金銭的に補償する。
例, 保険をかける。

【注意】

- ・ 日本語の「保証」は、Guaranteeを連想させやすく、Assureの概念に相当する言葉が不足している?
- ・ 同様に、Complianceを法令遵守に、Governanceを統治に、Managementを管理に読み替えてしまう誤解が起こりやすい?

Copyright©2010, 2017, 2020 KURIMOTOH, Nagoya University

13

高等教育の質 (Quality of Higher Education)

■ 高等教育の質は多義的な概念であり、高等教育の利害関係者が、学生及びその保護者、将来の雇用者、教職員など多様であるため、それぞれの利害関係者に対する質を単一概念で測ることは容易でない。

→ 多様性の確保による、新たな価値創造

■ ただし、高等教育の質を評価する際には、例えば大学ではどのような活動を行い、適切に機能しているか、またどのような特色を有し関係者にとって価値があるかといった諸活動の質を分析・評価することとなる。

→ IRの必要性 (Evidence Based Policy Making)

■ また、高等教育の質を計る視点としては、①卓越性、②任意に定められた基準に対する適合性、③自らが定める目標に対する達成度、④関係者の満足度が考えられる。

適切で的確な達成目標 (DP) をいかに設定するか!

大学組織の目的や文化: 実質化する目標 (目標設定) → 課程 (編成) → 指配

Copyright©2010, 2017, 2020 KURIMOTOH, Nagoya University

14

自己点検・評価※0 (Self-Assessment ※1)

■ 大学等が、自己の目的・目標※2に照らして教育研究等の状況について点検し、その結果優れている点や改善すべき点などを評価を公表するとともに、その結果を踏まえて改善向上を行っていくという質保証の仕組み。

■ 学校教育法において、その活動が義務化されており、高等教育の質保証は一義的に大学等自らが主体的に行うものという点が示されている。

※0 直訳の Self-check and evaluationではない!

※1 教育以外の、分野を超えて共通する概念として『自己顕彰』がある。

- ・ 広辞苑: ； 智恵をもって事物の真相を明らかにすること。
- ・ 辞林: 主観を交えずに冷静にみとめること。
- ・ 明鏡国語辞典: 主観をまじえずに、冷静な観察と思考から物事の本質を認識しようとすること。

※2 Goals (最終到達点) and Objectives (達成目標)

15

教育学修の内部質保証システムの要件

機関としての3層構造で質を確保する仕組み

- ・ 第1層: 授業レベル
- ・ 第2層: プログラムレベル
- ・ 第3層: 機関レベル

16

組織が質を確保・維持・保証するためにできること

授業レベル: 相互の組み合わせによる授業 (一貫性)

教育課程レベル: 相互の組み合わせによる有機的な編成 (一貫性)

機関レベル: 機関の共通枠組 (整合性)

大学の基本理念

Copyright©2010, 2017, 2020 KURIMOTOH, Nagoya University

質システムの工学屋から見た高等教育の質 17

(Outputs) 教育成果 ← 学修成果 (Outcomes)

教授陣 人の育成と醸成

Copyright©2003, 2016, 2021 KURIMOTO, Nippon University

19

まとめに代えて、Research Question その1

- ☑ 新学部・新学科の学修成果をどう測定しますか？
- ☑ 何を測定項目にすれば、適切でしょうか？
- ☑ そのための前提となる要件や取組は何でしょうか？

物差として、GPA、修得科目の種類や数、GPS-Academic、Suivi-PORT、合格率、就職率・離職率（従業員数、上場/非上場、売上高/利益率等）、進学率、教育結果、学修成果、単年でない満足度、OG会の参加率など

質システムの工学屋から見た高等教育の内部質保証システム 18

(Outputs) 教育成果 ← 学修成果 (Outcomes)

教授陣 大学憲章(目的)

目標達成の教育課程[方法]

Copyright©2003, 2016, 2021 KURIMOTO, Nippon University

20

例. 情報デザイン学科DPの比較

近隣大学X学科 本学科

- 情報社会の理解に必要な教養と豊かな人間性を身に付け、主体的に行動する力を有している。
- 情報工学ならびに数理・データサイエンス・AIの知識・技術を身に付けている。
- 社会課題の解決に向けてソフトウェアやシステムを提案したり、デジタルコンテンツを制作したりすることができる。
- 課題解決のための方策を計画し、他者と協働しながら実行することができる。
- 修得した思考力・行動力・提案力を総合的に活用することができる。
- 学士(情報デザイン学)の学位を授与します。

近隣大学Y学科 本学科

- データサイエンスやAIに必要な情報技術、情報デザインやメディアコミュニケーションの理論とその実現のための方法、図書館や博物館を中心としたデジタルアーカイブの推進にかかわる専門的な知識と技術。
- 現代の情報社会における課題解決に、データサイエンスやAIがどのように活用できるかについての思考力、デジタルコンテンツを活用する上で求められる権利と倫理に基づく判断力、必要な情報を多様な表現方法（文章、図、映像等）で他者に的確に伝えることができる表現力。
- 自身の有する情報技術やデータ分析等に関する知識や技能を用いて社会の課題解決に貢献しようとする主体性、種々のアイデアや計画を賛同し生かそうとする多様性、多分野の他者とプロジェクトを実行する際に必要な協働性。

Copyright©2023 KURIMOTO, H.

21

例. 情報デザイン学科DPの比較

近隣大学Y学科 本学科

- 情報社会におけるさまざまな問題を「観察や洞察によって把握し、其感を持ちながら思考する力」。
- 問題解決にとどまらず 未来のビジョンを提示し、解決方法を創造的に構想する力」。
- さまざまなアイデアやビジョンを「わかりやすく美しい表現で示し、テクノロジーを適切に利用しながら、社会に実践していく実行力」。

Copyright©2023 KURIMOTO, H.

23

相山女学園大学憲章 (卒業認定要件である、機関DPとの整合)

- 本学園の教育理念「人間になろう」の下、専門の学術を教授研究し、高い知性と豊かな情操を兼ね備えた人材育成を目指します。
- 機関DP①：専門分野における知識と技能を備え、科学的・学問的な視点から事象を捉えることができる。
- 機関DP②：「人を大切にし、人と支えあい、自らがなされる」社会人として必要な教養と知性を身に付けている。
- 機関DP③：大学で学んだ知識や技能に基づき、答えのない課題や目標に対して創造的に考え、多様な人々と取り組むことができる。

学部・学科のDPとの整合性？

齟齬はありませんか？

Copyright©2023 KURIMOTO, H.

22

参照基準：学士に照らした専門分野別の獲得すべき能力

専門分野	獲得すべき能力
情報工学	1. データサイエンスやAIに必要な情報技術、情報デザインやメディアコミュニケーションの理論とその実現のための方法、図書館や博物館を中心としたデジタルアーカイブの推進にかかわる専門的な知識と技術。
現代の情報社会	2. 現代の情報社会における課題解決に、データサイエンスやAIがどのように活用できるかについての思考力、デジタルコンテンツを活用する上で求められる権利と倫理に基づく判断力、必要な情報を多様な表現方法（文章、図、映像等）で他者に的確に伝えることができる表現力。
自身の有する情報技術	3. 自身の有する情報技術やデータ分析等に関する知識や技能を用いて社会の課題解決に貢献しようとする主体性、種々のアイデアや計画を賛同し生かそうとする多様性、多分野の他者とプロジェクトを実行する際に必要な協働性。

Copyright©2024 KURIMOTO, H.

24

情報社会学部のDP (卒業認定要件である、機関や学科との整合)

- 学部DP①：現代の情報技術の活用と現代社会のしくみや課題に関する知識、人々が暮らしやすい情報システムの構築に必要な知識
- 学部DP②：現代の情報技術と現代社会の課題解決に応用可能なデータや情報の活用に関する技能、課題解決に必要な情報をデザインできる技能
- 学部DP③：グローバル化が加速する現代社会の多様な課題を認識し、それらの評価ができる客観的な判断力、現代社会に流通するデータや情報の活用に関する適切な判断力
- 学部DP④：多様な文化が共生する持続可能な社会の実現に寄与する構想力、その意図と内容を正しく他者に伝えることができる表現力
- 学部DP⑤：情報技術の発展が社会に与える影響や現代社会の課題に対する強い関心、地域社会の具体的な課題に取り組もうとする主体性
- 学部DP⑥：持続可能な社会の実現のために、種々の意見を賛同しながら、多方面の知識・技能を活用する多様性と協働性

機関や学科のDPとの整合性？ 測定可能ですか？

Copyright©2023 KURIMOTO, H.

25

まどめに代えて、Research Question その2

情報デザイン学科/現代社会学科の
他大学と比した特長、特色、独自性は何でしょうか？

26

i 特色ある教育プログラムへの再構築

- 求められている人を醸成する新たな教育学修や授業の開発
- 奪い合いから協創へ、ベンチマーキングする大学？
- 関東や関西から受験生がくるような魅力ある情報デザイン学
 - ◆ 福山女学園大学 情報社会学部・情報デザイン学科
 - ◆ ○○○○大学 情報学部・情報デザイン学科
 - ◆ ○○○○大学 デザイン工学部・情報デザイン学科
 - ◆ ○○○○大学 人間情報学部・情報デザイン専修
 - ◆ ○○○○大学 芸術工学部・情報環境デザイン学科

※できれば関東・関西の著名な大学と伍してゆく。
 東京大学 デザイン学部

Copyright©2015 SHIMOTO, H

27

i 教育の質保証への備えと準備

- RQ1
 - ☑ 学部・学科の学修成果をどう測定しますか？
 - ☑ 何を測定項目にすれば適切でしょうか？
 - ☑ そのための前提となる要件や取組は何でしょうか？
- RQ2
 - ☑ 関東が関西から志願者を増やし、社会からの存在感を高めるため 情報デザイン学科や現代社会学科の特長や独自色を何にしますか？

↓

**事実前提から価値前提へ、
視座と思考を少し変えて、情報をデザインしませんか？**

28

参考資料

(1) 高等教育局 高等教育企画課 大学政策・評価室長 (2025.07.08) :
 高等教育政策の動向～「知の総和」発中を踏まえた認証評価の見直しの方針性へ、令和7年度評価充実協議会より、大学機関として必要箇所のみ抜粋
https://www.jikeac.ac.jp/service/seminar/pdf/seminar_r07_ito_material.pdf
https://www.mext.go.jp/content/20250128_mst_koutou02_000039883_5.pdf

(2) 公益財団法人 日本高等教育評価機構 評価事業部長 陸穂史 (2025.12.03) :
 翌4年度からの認証評価の新基準～上な変更点を中心に～、愛知県私大教務研究会・講談会の配付資料より、学部学科として、必要箇所のみ抜粋

(3) 公益財団法人 大学基準協会の第3選目の認証評価結果 (公表) から、ベンチマーキングに資する大学を抜粋

i am Sugiyama

私を選ぶのは、わたし。

【1】2025年度現代マネジメント学部FD活動**1. コンピテンシーテスト (GPS-Academic) 結果報告**

現代マネジメント学部生に対し実施されたコンピテンシーテストに関し、株式会社ベネッセiキャリアからその分析結果および今後の活用方法の説明会を開催し、本学部全員が参加した。1年生の受検結果は、第1回学部FD研修会として2025年7月8日、3年生については第3回学部FD研修会として2026年1月20日に実施した。

2. 教育活動における生成AI活用

第2回学部FD研修会として、2025年10月14日、本学部にて当該分野の科目を担当する教員を講師として、本学教育における生成AI（人工知能）活用方法の具体例と留意点を議論した。

【2】2025年度現代マネジメント学部FD活動の振り返り

1年生のコンピテンシーテスト (GPS-Academic) 結果については、次のようなフィードバックがあった。

- 全受検者平均に対し、思考力総合、批判、協働、創造の各思考力平均スコアの差分が縮小。
- 創造的思考力の分布は、その分散が収まり分布が良化。
- 姿勢・態度はレジリエンスの平均スコア、分布ともに対前年で見て改善、全受検者平均との差分が縮小。
- 大学志望度の第一志望割合は高水準を維持し、納得度はこの3か年の中で最高。

3年生の結果については、次のような評価が示された。

- 思考力総合スコア良化、創造的思考力の伸びが思考力総合のスコアを押し上げ。
- 姿勢・態度は、レジリエンス、リーダーシップ、コラボレーションの各項目が良化。
- 経験は、自己管理、対人関係、計画実行の各項目で押し上げ。

こうした分析結果を参加者が共有するとともに、その割合は極めて小さいながらも、学生意識調査の一部の項目で消極的な意見が示されている学生層に対しては個別のコミュニケーションが重要であることを確認した。

教育活動における生成AI活用に関する研修会では、LLM（大規模言語モデル）の概要、LLMがデータとして読み込むことで網羅出来る範囲が紹介された後、学生がこれを使いレポート等を提出することを前提として、今後の教育を実施していく必要のあること、その対応方法について議論が行われた。

【1】2025年度に教育学部で独自に実施したFD活動

教育学部では、教育学部独自のFD活動として、以下の5件のFD活動を実施した。これらは、教育学研究科FD委員会と共催で開催したものである。

1 「生成AIやICTを活用した授業、指導と評価の一本化について」講習会の開催

講師：大西陽介氏（教育×AI/ICT活用サポーター/アドバイザー・A1教育カレッジ代表・起業家）

日時：2025年10月14日（火）17:00-17:45

場所：教育学部棟B120

参加者数：25名および全学教職員への動画公開

内容：公立中学校教諭として年間200時間以上の業務効率化を実現した経験に加え、ICTや生成AIの活用、指導と評価の一体化に精通した講師により、下記を講演いただいた。ICT活用の成果として個人の情報収集だけでなく意見共有や共同編集といった協働学習も含まれること、他方で活用格差、新たな課題の発生など課題もあること、また生成AIを用いたテストの採点時間の短縮、英語の歌詞作成と作曲、授業の導入アイデア出しなど、教育業務の効率化に加え、教育実習生による活用までご提案いただいた。また、講演の途中、意見共有のアプリ「ふきだしくん」（下記参照）も試す機会をいただいた。また講演の最後には活発な質疑応答も行われた。「ふきだしくん」：<https://477.jp/>

2 授業改善にかかわる相互参観実施（①）と授業検討会の開催（②）

司会：学部FD委員（伊藤博美）

日時：①相互参観 2025年11月10日（月）～27日（木）

②検討会 2025年12月9日（火）17:30 - 18:30

場所：①相互参観 教育学部棟(A203、A304、B308、C311)

②教育学部棟B120

参加者数：25名

内容：教育の要である授業について相互に検討を深めることを目的として、以下のように行った。

① 11月10日（月）～27日（木）に、教員は以下の授業を1つ以上参観。

- ・川村先生、確率論・統計学、1,3年（新旧カリ合同）、11月10or17日（月）4限、A304
- ・丹羽先生、発達障害児等の教育、3年、11月17日（月）1限、A203、
知的障害児の心理、1年、11月26日（水）5限、A203
- ・安達先生、子どもの異文化間教育、3年、11月10日or17日（月）3限、
C311、外国語（英語）、2年、11月12日（水）1限、C311
- ・森先生、国語の指導法、3年、11月27日（木）2限、B308

② 12月9日（火）の教授会・教育学研究科委員会後、授業検討会を開催。

上記4授業の授業者とその参観者が集まり、4グループをつくって話し合った。話し合いでは、まずグループ内で司会、タイムキーパー、記録、発表の役割分担と行い、次に「アクティブ・ラーニング支援パターンカード（ALPカード）」（クリエイティブシフト社・ベネッセコーポレーション2019年）に示されたアクティブ・ラーニングの方法について、参観した（または実施した）授業において実践されていたものを選択し、実践の具体的内容についてグループ

内で共有した。次に、ALPカードに示された方法から、自分が実践したいと思うものをあげ、理由を共有した。その後各グループが発表して全体に話し合いの内容を共有した。各グループの話し合いでは、授業改善に向けた様々なアイデアやヒントが盛り込まれており、フロア全体が刺激的な場となった。最後に司会から白石弘幸（2017）の「組織学習と学習する組織」の概要を説明し、学部構成員間がそれぞれの専門性を有しつつ、時にダブルグループまたは高次学習とアンラーニングを行い授業方法の向上を図る必要があることを共有した。

3 「明日の保育・教育」を考えるFD講演会：「椋山女学園大学における19年間」の開催

講師：中島正夫 特命教授

日時：2026年1月24日（土）15:50-16:50

場所：大学会館3階Spirit教室

参加者数：約200名

内容：「明日の保育・教育を考える」をテーマとするFD講演会では、講演者は年度末をもって退職される先生に依頼し、「最終講義」としてお話しいただいている。本年度は、中島正夫教授にご講義をお願いした。

中島正夫先生には、椋山女学園大学に19年に渡ってお勤めになられた間の数々のご業績やご活動を、先生が世界各地の美術館で鑑賞された絵画を交えてお話しいただいた。特に発達障害やASD等の特性のある子どもとその保護者を支援する自治体による体制整備に向けた取り組み、厚生省勤務時に担当した経験を踏まえた母子健康手帳制度に関するご研究、食育推進センターの初代所長として、学園内の園・校および事務局も含めた体制整備と食育基本指針の策定、実態調査の企画・実施・とりまとめ、大学キャンパスプロジェクトの推進、園や小学校での食育の技術支援などの取り組みなど、臨床だけでなく行政の経験も踏まえた熱意ある研究者の姿勢から学ぶべきことが多大にあった。最後に、中島先生も参加された教育学部音楽コースの学生と有志教員によるドラムジカの動画が流され、会場は感動に包まれた。

なお、この講演会は4年生が全員参加していたこともあり、終了後に、Sugiyama Connectについて、「Sugiyama Connect 説明会」に出席していた学生による説明会を設けた。それにより、教員・学生ともに、今後の卒業生と学部とのつながりを確認した。

4 教育学部・教育学研究科外部評価結果報告会について

講師：鈴木裕子氏（名古屋柳城女子短期大学学長）

趣旨説明：磯部錦司学部長

日時：2026年2月10日（火）17:00-18:00

場所：教育学部棟B120

参加者数：27名

内容：教職・保育系は全国的に厳しい局面にあるなかで、椋山女学園大学教育学部・教育学研究科は、教育課程と質保証の完成度が高いというのが、外部評価委員全員に共通した総評であった。具体的には、①内部質保証が日常的に機能している、②学修成果の可視化がSugi-PORTによって実現されている、③理論と実践の往還が段階的に計画されている教育課程であること、④成果が進路実績によって証明されていること、⑤地域連携、国際化、ICTなど現代の教育課題に応答していることが肯定的な評価としてあげられた。他方、課題としては①良い教育を“社会に語る力”（伝え方・届け方）、②卒業後の成果追跡をエビデンスとして分析、社会還元する段階に進むこと、③「探究」を中心とした学校教育に向けた、学習過程を分析できる教師の養成（その基盤はできている）があげられた。今後は、学部と研究科の一体的な体制に基づき、高度専門職養成や現職教員の学び直しを見越し、総合学園の強みを生かして、地域の教育モデル

の役割を果たすことが期待されるとのことであった。また講演後は参加者と活発な質疑応答が交わされた。

5 「大学広報戦略と学部広報に関する意見交換」の開催

講師：渡部眞也広報課長

趣旨説明：磯部錦司学部長

日時：2026年3月10日（火）17:00-17:30

場所：教育学部棟B120

参加者数：26名

内容：磯部学部長より、外部評価でも指摘されていた全国的な教職・保育系の不人気という状況に抗するため、次年度の学部広報に向け、大学広報の戦略や考えについて共有することを目的としている旨、趣旨説明があった。

渡部課長からは、まず学生募集の定義（ブランディングの下に広報／PRおよび学生募集があること）、メディアの分類（本学で所有・運営する情報発信メディアと、マスコミやネット媒体の広告枠を購入するペイドメディア、SNSや動画共有サイトなどのシェアドメディア）が示された上で、認知から出願までのマーケティングが、MA（マーケティングオートメーション）、CRM（顧客関係管理）へと細分化・可視化されていることが紹介された。次に高校生の進学決定プロセスの探索→評価→決定に対して、コントロールが中程度である評価の段階に「その大学でしか得られないもの」（＝価値）を高校生に見出させることが重要と説明された。こうした広報の基礎知識を基に、渡部課長から学部には、情報提供および公式WEBサイトでの情報発信の再評価と、学生の声の収集／分析をお願いしたい旨の話があった。最後に、参加者との活発な質疑応答が交わされた。

【2】2025年度教育学部FD活動の振り返り

- ・本年度は、外部評価の受審結果に加え、文部科学省による全国学生調査の結果を踏まえた、大学（教育、スポーツ、芸術、化成分野）の[ポジティブリスト](#)に本学部が15項目掲載されたことなどから、本学部の強みを改めて確認すると同時に、発信力の弱さを認識することができた。
- ・本年度行ったFD活動は、ICT活用などの現代的課題や授業参観とその後のワークショップなど、昨年度から継続して企画したものであり、企画した講習会や授業検討会、講演会はタイムリーで有意義であった。特に授業検討については活発な討議が行われ、今後も継続して行っていくことが望ましいと考えられる。
- ・学生の声をFDに活かしていくことについては、上述のポジティブリストの「授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている」という項目で本学部が19位にランクインしていることから、一定程度はできていると思われる。しかしこれに慢心することなく、今後は同リストの「質疑応答など、教員等との意見交換の機会がある」、「TAなどによる補助的な指導がある」、「文献・資料を収集・分析する力」、「論理的に文章を書く力」、「数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能」、「教職員が熱心に教育に取り組んでいる」などの項目でランクインできていないことを踏まえ、授業の質向上を図っていくことが求められる。

- 【1】委員会メンバー：又吉忍（委員長）、川島一晃（副委員長）、熊澤千恵、中島奈緒子
- 【2】2025年度看護学部FD委員会の活動目標 新カリキュラム開始等の背景を踏まえ、教育の質の向上を目指し、椋山女学園大学看護学部の教員としての資質向上のための活動（教育、学部運営活動、研究、社会貢献活動の推進に向けたFD委員会の活動）を行う。
- 【3】活動内容と結果及び課題

1. 看護学部第1回FD研修会の企画、運営、グループワーク内容のまとめ

テーマ：「新しいカリキュラムおよび看護学教育モデル・コア・カリキュラムの重要ポイントを共有する会」；2025年9月2日（火）10：50～12：20；参加者38名

昨年度に開催されたカリキュラムWGと学部FD委員会で開催した研修会などを経て、新カリキュラム骨組みが構成された。その新カリキュラムおよび看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和6年度改訂版）の重要なポイントについて、学部教務委員会、カリキュラム検討ワーキングと連携のもと、看護学部構成メンバー全員で理解し、教育実践に向けた意見交換・質疑の機会として研修会を実施した。
*学部FD委員会と新カリキュラムワーキングとの協働開催。

2. 看護学部 助手・助教会 学習会

1. 助教・助手を対象に“実習指導に関する学習会”を実施。

*テーマ：「NANDA-I 看護診断の理解を深めるために-カルペニートとゴードンの立場の違い-」

2025年12月22日（月）16：30～17：25 参加者18名

*「具体的なPESの考え方について」

2026年1月23日（金）16：30～17：30 参加者17名

実施目的：本学における助手及び助教の臨地実習での役割を理解し、必要な知識を修得し、本学助手・助教としての実習における学生支援のためのスキルアップを図る。

学習会内容：学部長の講義を実施し、講義内容を踏まえ、事例を用いてテーマ内容について、グループワーク・意見交換にて学習の共有化を図り、また実際の実習指導における課題等についての共有とその対策について検討した。

*学部FD委員会と助手・助教会との協働開催。

3. 授業・実習アンケートの回収方法についての検討および課題

回収方法については、昨年度と同じ方法（当該科目の最終回に時間を少しとり、教室で入力作業を実施）で実施した。実習アンケートについては、担当員からメール等の連絡を複数回行い、回答率の増加に努めた。また、教員のリフレクションに新カリキュラムへの検討事案内容の有無を学部FD委員会が確認し、検討事案については新カリキュラムワーキングと共有を図った。

2025年度 学部FD活動報告

学部	予定時期	活動内容	活動目標	活動報告
看護学部	9月2日	<p>【新しいカリキュラムおよび看護学教育モデル・コア・カリキュラムの重要ポイントを共有する会】 10:50~12:20 38名 昨年度に開催されたカリキュラム WG と学部 FD 委員会で開催した研修会などを経て、新カリキュラム骨組みが構成された。その新カリキュラムおよび看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和6年度改訂版）の重要なポイントについて、学部教務委員会、カリキュラム検討ワーキングと連携のもと、看護学部構成メンバー全員で理解し、教育実践に向けた意見交換・質疑の機会として研修会を実施した。 *学部FD委員会と新カリキュラムワーキングとの協働開催。</p>	<p>・カリキュラム改正の背景を踏まえ、教育の質の向上を目指し、椋山女学園大学看護学部の教員としての資質向上のための活動を行う。</p>	<p>全教員でカリキュラムの重要ポイントを共有し、その内容について意見交換を実施した。 [参加者38名] 杉浦美佐子、小林純子、福田誠司、川島一晃、高植幸子、前田節子、井野恭子、寺西美佐絵、瀧田咲枝、山下恵、青木ゆかり、舟橋実希、真鍋里沙、竹井留美、宇佐美久枝、生田美智子、中島奈緒子、福田由紀子、又吉忍、小松美砂、近藤絵美、井上千秋、川上將、土居瑞穂、中崎彩乃、中原弘喜、松野杏奈、中嶋文子、河合桂子、安本卓也、高田理衣、鈴木尚巳、佐々木麻希子、西本甘奈、石原由華、熊澤千恵林和枝、川瀬とし子</p>
	9月・2月	<p>・実習アンケート・リフレクションの結果を整理する。</p>	<p>・実習について学生の意見を聴取し、各自の授業改善に役立てる。</p>	<p>授業アンケート同様に、看護学部各領域実習についてもアンケートを実施、科目責任者がリフレクションを作成し、その内容を学生が閲覧できるように確立した (Smap)。 *学部FD委員が全てのリフレクションを確認し、その内容にカリキュラム改善点等の意見が含まれていないかを確認、該当内容があれば、新カリキュラムWGへ報告する。</p>
	12月22日	<p>【助手・助教会 学修会】 16:30~17:25 18名 本学における助手及び助教の臨地実習での役割を理解し、必要な知識を修得し、本学助手・助教としての実習における学生支援のためのスキルアップを図る。 *学部FD委員会と助手・助教会との協働開催。</p>	<p>学部長の講義を実施し、講義内容を踏まえ、事例を用いてテーマ内容について、グループワーク・意見交換にて学習の共有化を図り、また実際の実習指導における課題等についての共有とその対策について検討した。</p>	<p>1. 勉強会 杉浦学部長より「看護学実習で活用されるカルペニートとゴードンについて」もご講義いただいた。 上記内容を踏まえ下記内容の意見交換・共有を図った。 1) 学生指導における教員の役割 (1) 学生のレディネスを見極める (2) ベッドサイド指導を“必須行動”として (3) 臨床ナースとの関係構築 2) 看護診断教育の質の向上 [参加者18名] 杉浦美佐子、井上千秋、大比叡和子、瀧田咲枝、中島奈緒子、川上將、佐々木麻希子、鈴木尚巳、武田智美、土居瑞穂、中崎彩乃、中原弘喜、西本甘奈、舟橋実希、松野杏奈、真鍋里沙、河合桂子、米津貴子</p>
	1月23日	<p>【助手・助教会 学修会】 16:30~17:30 17名 本学における助手及び助教の臨地実習での役割を理解し、必要な知識を修得し、本学助手・助教としての実習における学生支援のためのスキルアップを図る。 *学部FD委員会と助手・助教会との協働開催。</p>	<p>学部長の講義を実施し、講義内容を踏まえ、事例を用いてテーマ内容について、グループワーク・意見交換にて学習の共有化を図り、また実際の実習指導における課題等についての共有とその対策について検討した。</p>	<p>前回の講義・共有内容を踏まえて、事例を用いた学修会を実施した。 [参加者17名] 杉浦美佐子、井上千秋、大比叡和子、瀧田咲枝、中島奈緒子、川上將、佐々木麻希子、鈴木尚巳、武田智美、土居瑞穂、中崎彩乃、中原弘喜、西本甘奈、舟橋実希、松野杏奈、真鍋里沙、米津貴子</p>

4 大学院FD活動報告

- 4 - 1 大学院FD委員会記録
- 4 - 2 大学院授業アンケート

<p>(第1回) 2025(令和7)年 6月18日(水) ～6月23日(月) メール会議</p>	<p>1 報告 なし</p> <p>2 議題 (1) 2025年度大学院FD委員会活動計画に関する件 (2) 2025年度前期大学院授業アンケートに関する件 (3) その他</p>
<p>(第2回) 2025(令和7)年 9月23日(火) 17時30分～17時43分</p>	<p>1 報告 (1) 2025年度大学院FD委員会活動計画に関する件 (2) 2025年度前期大学院授業アンケート実施結果について (3) その他</p> <p>2 議題 なし</p>
<p>(第3回) 2025(令和7)年 11月25日(火) ～11月28日(金) メール会議</p>	<p>1 報告 (1) 2025年度大学院FD活動計画検証(中間検証)について (2) 2026年度新任教員研修計画について (3) その他</p> <p>2 議題 (1) 2025年度後期大学院授業アンケート実施に関する件 (2) 2025年度FD活動報告書に関する件 (3) その他</p>
<p>(第4回) 2026(令和8)年 1月27日(火) ～1月30日(金) メール会議</p>	<p>1 報告 特になし</p> <p>2 議題 (1) 椋山女学園大学FD活動に関する方針に関する件 (2) その他</p>
<p>(第5回) 2026(令和8)年 2月24日(火) ～2月27日(金) メール会議</p>	<p>1 報告 (1) 2025年度後期大学院授業アンケート実施結果について (2) 「椋山女学園大学・大学院FD活動報告書(2025年度版)」原稿の 締切確認について</p> <p>2 議題 (1) 2025年度大学院FD活動計画検証に関する件 (2) その他</p>

1. 実施概要

・実施期間

前期：2025年7月15日（火）～2025年8月1日（金）

後期：2025年12月22日（月）～2026年1月24日（土）

・実施対象科目：大学院での受講科目すべてを対象として選択式及び記述式で回答

・実施方法：Google フォームにより Web で実施

2. 実施状況

【前期】

研究科	対象者数	回答数	回答率
生活科学研究科	8	2	25.0 %
人間関係学研究科	20	14	70.0 %
現代マネジメント研究科	10	5	50.0 %
教育学研究科	1	0	0.0 %
計	39	21	53.8 %

【後期】

研究科	対象者数	回答数	回答率
生活科学研究科	6	6	100%
人間関係学研究科	20	6	30%
現代マネジメント研究科	11	6	54.5 %
教育学研究科 *	1	1	100%
計	38	19	50%

*教育学研究科は、座談会形式で学生1名の聞き取り実施

5 研究科FD活動報告

- 5 - 1 生活科学研究科
- 5 - 2 人間関係学研究科
- 5 - 3 現代マネジメント研究科
- 5 - 4 教育学研究科

生活科学研究科FD委員 委員長 川野 紀江
委員 加藤 昌彦
解野 誠司
及川佐枝子

生活科学研究科は、中部地方初の生活科学系大学院として、衣・食・住に関わる学問の発展に寄与できる人材育成を目標としている。食品栄養科学専攻（修士課程）と生活環境学専攻（修士課程）の2専攻によって構成され、より高度な研究者養成を目指す博士後期課程の人間生活科学専攻も有している。本研究科のFD委員会は、2012年に発足されて以来、大学院の授業内容や教育方法を改善し向上させるための活動を続けている。2025年度は、以下の活動を行ったので報告する。

1. 生活科学研究科新入学生に対するプレFD研修

2021度に、博士課程の学生の中で、特に将来大学院教員をめざす可能性のある学生を対象に、「学士課程の授業を担う機会を与えることで、ティーチングに関わる技能を高め、将来の大学教員として指導的役割を果たす人材の育成につとめる。」こと、また2022年度に作成した「大学院博士課程プレFD・大学教員プログラム—大学で教えるために—」の資料をもとに、大学院生対象のガイダンスで、TAとしての心がまえを、研究科長からレクチャーすることを決めた。

今年度は、博士課程の新入生がいなかったため博士課程の学生に対するガイダンスは実施せず、2025年4月4日に修士課程の大学院生に対して、研究科長が学生を教育指導する観点と研究を指導する観点から説明を実施し、各院生から受講証明書を提出させた。同時に、研究倫理及び、生成AI使用にあたっての注意事項を示した。

2. 研究成果発表会の実施

修士課程の両専攻における中間発表会、修士論文発表会を開催した。個別の指導教員のみならず、他の教員からも様々な意見や助言を受けることにより、大学院生の研究活動がさらに向上すると考えられ、とても有益な会となった。

(1) 大学院修士課程 中間発表会

2025年9月9日（火）

（食品栄養学専攻）

なし

（生活環境学専攻）

- ・ 上原衣織 「照明設備による温熱環境の緩和効果に関する基礎的研究
—室温、照度、色温度の複合環境が人体の温熱感覚に及ぼす影響—」
- ・ 国京真愛 「エネルギーの釣合に基づく木造制振住宅の評価手法の提案と既存建物への適応に関する研究」

(2) 大学院修士論文発表会

2026年2月17日（火）

（食品栄養学専攻）

なし

(生活環境学専攻)

- ・上原衣織「照明設備による温熱環境の緩和効果に関する基礎的研究
—室温、照度、色温度の複合環境が人体の温熱感覚に及ぼす影響—」
- ・国京真愛「エネルギーの釣合に基づく木造制振住宅の評価手法の提案と既存建物への適応に関する研究」

上記内容の修士論文の審査及び最終試験を行い、続く研究科委員会において修士の学位授与が妥当であるとの結論に至った。

3. 授業アンケートの実施

本年度も生活科学研究科に在籍する大学院生を対象に、前期・後期の2回授業アンケートを実施した。方法は、Googleフォームでwebにより実施した。アンケート回収率を、次の表に示す。

	2025 前期	2024 前期	2025 後期	2024 後期
食品栄養科学専攻（修士課程）	33%(1/3)	100%(2/2)	100%(1/1)	100%(2/2)
生活環境学専攻（修士課程）	20%(1/5)	50%(2/4)	100%(5/5)	75%(3/4)
合計	25%(2/8)	67%(4/6)	100%(6/6)	83%(5/6)

なお、アンケートの設問内容は昨年度と変わっておらず、前期・後期とも以下のとおりである。

※設問 1-1)～1-3)は選択肢形式、設問 2-1)～2-4)は記述形式

- 1-1) 所属専攻の科目構成は適切か
- 1-2) 所属専攻の時間割は適切か
- 1-3) 研究指導は適切に行われているか
- 2-1) 大学院の授業科目及び研究指導科目で興味深かった点、有益であった点など
- 2-2) 大学院の授業科目及び研究指導科目の改善すべき点
- 2-3) その他研究指導に関する点で、有益だった点、改善すべき点
- 2-4) 授業環境について、意見・要望
- 2-5) その他、気づいた点を自由記述

これらの得られたアンケート結果について、確認と検証を行った。

生活科学研究科の回収状況についてみると、2025年度前期は25%と低かったが、後期は100%と全員の回答であった。前期に回収率が低かった生活環境学専攻修士課程1年生には、後期は口頭でも回答を促した。アンケートに費やす時間はそれほど多くないと考えられ、積極的に授業アンケートへの回答を呼びかけることで回答率は上げられると考える。

次に、アンケートの回答内容について検証した。選択肢形式の設問では、前期、後期とも1-1)、1-2)、1-3)の全てにおいて、「そのとおり」「どちらかといえばそのとおり」と肯定的な回答であった。

前期の記述形式の設問においては、2-4) 授業・研究環境について、「学びなおし」の機会や環境についての要望があった(食品栄養科学専攻)。食と健康分野の専門的知識を修得するためにも基礎知識は重要であるため、学生の能力に応じて学びなおしを含めた授業を実施することにより、学生の満足度の向上が期待できると考えられる。

2-5) その他、では、209/210室における修士学生の部屋の使い方についての指摘があった(食品栄養科学専攻)。修士学生の部屋については、少なくとも修士の学生が使用している時間帯には学部生が立ち入らないよう注意喚起するなど、対応策を考えた。

後期の選択肢形式の設問では、2-4) 授業・研究環境について、可能であれば主指導教員・副指導教

員を含めた3名での研究指導の時間が取れるとよい、との記述があった(食品栄養科学専攻)。研究内容を向上させるためにも、今後は主指導教員・副指導教員を含めた3名で議論する時間を設けることを指導教員に提案した。上記以外の自由記述は、よかったこと、有益だったこと等の内容であった。

4. 大学院生活科学研究科 院生ヒアリングの実施

以下の要領で、大学院生へのヒアリングを行った。

実施日時：2025年8月5日(火) 16:40-17:30

実施場所：生活科学部棟 107小会議室

参加者(教員)：加藤昌彦(研究科長)、解野誠司(専攻世話人)、保田倫子・井澤幸(将来構想委員)、
及川佐枝子・川野紀江(研究科FD委員)、藏澄美仁(学部長(オブザーバー))

参加者(学生)：食品栄養科学専攻1名、生活環境学専攻4名

ヒアリング内容は、3つのポリシー関連(認知度、意見、教育内容との整合性)、成績確認シートについて、施設・設備に対する意見、学習支援体制、大学院での学びと就職との繋がり等、である。学生の要望や不安に対して教員が回答し、有意義な意見交換がなされた。また、教育内容の確認や振り返りを行う貴重な機会となった。次年度も継続して、院生ヒアリングを実施する。

【1】実施報告

2024年度の人間関係学研究科のFD活動について、臨床心理学領域・人間共生領域の領域ごとに報告する。

1. 臨床心理学領域**(1) 研究教育活動****①心理学実験・心理学特殊実験のTA（前後期）**

学部2年生を対象とした心理学実験（前期）、心理学特殊実験（後期）のTAとして、大学院生7名（M1 5名、M2 2名）が1年間にわたり実験実習をサポートし、心理学研究法の実践的サポート、統計解析、レポート作成の相談にあたった。

②自主課題発表会（2026年1月8日）

心理学特殊実験の成果を発表する自主課題発表会において、大学院生（M1）5名が会場の司会（座長）等として運営に携わった。

③修士論文中間発表会（2026年2月27日）

2026年10月に修士論文を提出する予定である大学院生（M1）5名が、2026年2月27日に中間発表を行った。発表者である大学院生にとっては、指導教員以外の教員からさまざまな助言指導を得ることができ、より広い観点から研究にアプローチする機会となった。また、指導教員にとっても、大学院生の研究を客観的に見直す良い機会となった。

④臨床心理相談室紀要『相山臨床心理研究』の発行

教員4名が研究論文を執筆し、大学院生（M2）11名が事例研究を執筆した（2026年3月9日発行）。大学院生の事例研究については、外部の臨床心理士や精神科医からコメントをいただき、事例の理解や自身の臨床実践上の課題などを振り返ることにより、その後の臨床実践や研究に示唆を得る好機となっている。

⑤オープンキャンパス

大学院生15名（M1 5名、M2 10名）が分担して、心理検査体験および描画体験の補佐を行った。

⑥相山女学園中学校「こころの授業」の実施（2026年2月16日）

相山女学園中学校の道徳の時間において、教員4名と大学院生（M1）5名が「こころの授業」を行った。「ライフキャリア」についての説明を行った後に、それを考えるワークとして「ライフキャリアすごろく」を実施し、ライフイベントでの選択を想定した上で、意見交換を行った。大学院生は、心理概念の説明や、生徒が実施するワークのファシリテーションを行い、心理教育を体験的に学ぶ場となった。

(2) 臨床実践**①臨床心理士資格面接試験の個別指導**

臨床心理士資格試験の一次試験に合格した全員に対して、教員が分担して面接に対する個別指導を行った。

②公認心理師試験・臨床心理士資格試験対策講座

2025年11月17日から12月24日まで計12回、公認心理師試験・臨床心理士試験対策講座を外部講師と契約して開催した。参加者は、M2のうち8名であった。

③臨床心理相談室ケース報告書の提出（2026年3月）

臨床心理相談室では全相談員・実習員（教員・非常勤相談員・ケースを担当している大学院修了生・

大学院生)が個別に臨床実践を振り返り、主訴の改善や進捗を検討し、記録をきちんと保存することができたかについて振り返る機会として、年1回のケース報告書の提出を行った。大学院生・修士生には、心理専門職における職能として重要な位置を占める自身の臨床実践・ケースの主訴の改善度などを確認し、次年度以降の目的を明確化する機会となった。

④日進市教育委員会との連携事業

日進市内の小中学生の保護者を対象として、子どもの発達障害に関する相談会(発達障害保護者相談会)を開催し(2025年9月11・12日の2日間)、19件の保護者からの相談を受けた。

また小中学校への巡回指導として、教員が日進市内の13小中学校に、前後期を通じ原則として2回出向いて巡回指導を行った。

⑤相談室主催特別講演会(2026年1月24日)

外部講師を招いて、臨床心理相談室主催の特別講演会を開催した。講演会には、相談室員だけでなく、地域の方をはじめ、教育、福祉、医療など様々な領域から、多くの方にご参加いただいた。講師による、こどもの心理支援に関する講演は大変好評であり、日々の臨床活動を見直す好機となった。また、本学相談室の活動を、地域の方々に広く知ってもらう機会となった。

⑥公認心理師実習演習担当教員講習会、公認心理師実習指導者講習会への参加(2025年9月、2026年2-3月)

公認心理師実習演習担当教員講習会に1名の教員が5日間、公認心理師実習指導者講習会には2名の教員が各2日間参加した。公認心理師養成において重要な視点、学生支援の方法、実習機関との連携において重要なポイントなど、他機関の実習指導者や他大学教員とのワークを用いた実践的な研修により、本学における今後の課題を検討する機会となった。

2. 人間共生領域

本領域では前期と後期にそれぞれ1回、修士論文の中間報告会を行うこととしている。これは院生が領域を担当する全教員に対して修士論文作成のための研究の進捗状況を報告し、様々な助言、指導を受ける場として設定されており、今年度の前期は4月26日(土)に開催し、(兼任の指導教員1名を含む)領域の教員8名と院生2名が参加した。しかし、後期については入試業務等の影響で日程調整がうまく進まず、昨年度同様に開催することができなかった。

なおFD活動の一環として、領域担当教員による授業改善のための意見交換の場を中間報告会の後に設けたところ、メディア授業対応については、前向きな教員もいたものの、「実際に教室に来るほうが良い」という声も複数あった。とはいえ、社会人院生の受講環境を整えるうえでメディア授業科目の設定は有効であると考えられるため、6限開講の授業においては更にメディア授業を増やすことを検討していきたい。また、大学院版のSugi-PORTの可能性が指摘されたほか、現代マネジメント研究科の「履修証明プログラム」も参考になるのではないかという意見も出された。そして、研究活動に関しては、人間学・ジェンダー研究センターの運営や同センターが発行する『人間学・ジェンダー研究』第20号で「プロジェクト研究報告」を複数の教員が記すなど、アウトリーチが積極的になされたことも確認された。

【2】2025年度大学院授業アンケート結果について

前期・後期それぞれに実施された大学院授業アンケート結果の確認・検証について、臨床心理学領域・人間共生領域の領域ごとに報告する。

1. 臨床心理学領域

良好な評価が得られた科目として、研究基礎科目である「人間関係論」、研究発展科目の講義科目である「精神医学特講」「心理療法特講」「犯罪心理学特講」と演習・実習科目である「臨床心理学実習」「心理実践実習」「臨床心理査定演習」、研究指導に関わる「特別研究」についての記述が見られた。それぞれ

の記述では、専門的な知識や技術についてじっくりと学ぶことができた点や、臨床実践につながる深い学びや体験ができた点が評価された。

一方で改善要望としては、いくつかの授業において資料の提示方法に効率化を進めること、口頭での情報だけでなく視覚情報を増やすことが示された。これらについては、授業の特徴に応じた必要性に鑑みて改善を考慮することとされた。また、複数の統計ソフトの学習や研究に使用する機器の増加に関する要望も出されたため、学内で対応できるものはニーズに応じて検討するとともに、学会や研究会などでの学びも紹介することとした。さらに研究倫理審査に関して、頻度を増やすことや事前のスケジュールを示すことが要望されたため、今後は事前のスケジュールを示した上で、計画的に研究が進むよう指導を行うこととされた。

また研究指導については、概ね高評価が得られた一方で、教員と学生のコミュニケーション不足により問題意識が提示された。今後はより一層、教員と学生のコミュニケーションを図りつつ、各教員の判断だけでなく教員間での方針の共有や検討も進めていき、より良い教育・指導に努めたい。

2. 人間共生領域

人間共生領域の院生による回答は前期 1 件、後期 0 件であったため、前期回答分のみを検討した。「科目構成の適切さ」「時間割の適切さ」「研究指導の適切さ」のいずれにおいても「そのとおり」と回答しており、特に問題は見当たらない。自由記述欄の回答でも「参考文献をいくつか教えていただけたことは有効だった」という肯定的な回答が見られた。しかし、3 名の在籍者に比してアンケート回答率が悪いいため、今後は授業アンケートの実施期間中に周知を徹底するなどして、回答を促すよう心がけたい。

なお、本領域は社会人院生向けに土曜日開講を行っているが、今年度も後期の事例研究Ⅱにおいて、入試業務等と重なることが多く、事前の日程調整のうえ、隔週の連続 2 コマ開講にすることで授業回数を確保した。土曜日開講の授業形態については、隔週による 2 コマ開講を制度化するのを含めて、改めて領域内で検討する必要があると思われる。

【1】活動報告

1. 第1回修士論文合同発表会（1年生）（2025年8月8日）
研究計画の具体化、研究手法・対象の精緻化を目的として発表会が開催された。参席した教員から、各学生に対して、研究方法等について個別のアドバイスが提供され、本研究科教員の知見を活かしたフィードバックが提供された。
2. 第2回修士論文構想の合同発表会（1年生）（2025年12月23日）
第1回修士論文合同発表会におけるフィードバックも参照し、研究科学生はこれまでに発展させた修士論文の構想を紹介し、これに対し改めて総合的なフィードバックが提供された。
3. 2年生修士論文合同発表会（2025年8月8日）
データ、事例収集、論文の構成論理等具体的な重要事項について、参席した教員より助言が行われ、学生と教員との間で修士論文執筆に関するより詳細な議論が交わされた。
4. 2年生修士論文研究発表会（2025年12月9日）
最終段階の修士論文発表が行われ、論文の完成に向けて、指導教員を中心に最終的なアドバイスが提供された。
5. 前期授業アンケート調査と結果の検討（2025年7～8月）
前期に実施した授業アンケート調査では肯定的な回答が確認された。加えて、主指導教員が各科目の難易度や授業の早さなどについて個別のヒアリングを行い、修士課程の学生の理解度および満足度の改善を図った。
6. 後期授業アンケート調査と結果の検討（2026年1～3月）
後期に実施した授業アンケート調査結果に基づき、各指導教員は、個別ヒアリングを継続するとともに、フィードバック内容を今後の授業・研究科運営に反映させること、また、今年度のアンケート回答率が低かったことから、学生への周知を徹底し、これを高めていくことが確認された。
7. 認証評価、カリキュラム改正等に関する研修会（2026年3月10日）
現代マネジメント研究科の沿革と現状を確認した上で、今後の認証評価やカリキュラム改正等に向けた情報共有と意見交換を行った。

【1】2025年度に教育学研究科で独自に実施したFD活動報告

教育学研究科では、教育学研究科独自のFD活動として、以下の5件のFD活動を実施した。これらは、教育学部FD委員会と共催で開催したものである。

1 「生成AIやICTを活用した授業、指導と評価の一本化について」講習会の開催

講師：大西陽介氏（教育×AI/ICT活用サポーター/アドバイザー・A1教育カレッジ代表・起業家）

日時：2025年10月14日（火）17:00-17:45

場所：教育学部棟B120

参加者数：25名および全学教職員への動画公開

内容：公立中学校教諭として年間200時間以上の業務効率化を実現した経験に加え、ICTや生成AIの活用、指導と評価の一体化に精通した講師により、下記を講演いただいた。ICT活用の成果として個人の情報収集だけでなく意見共有や共同編集といった協働学習も含まれること、他方で活用格差、新たな課題の発生など課題もあること、また生成AIを用いたテストの採点時間の短縮、英語の歌詞作成と作曲、授業の導入アイデア出しなど、教育業務の効率化に加え、教育実習生による活用までご提案いただいた。また、講演の途中、意見共有のアプリ「ふきだしくん」（下記参照）も試す機会をいただいた。また講演の最後には活発な質疑応答も行われた。「ふきだしくん」：<https://477.jp/>

2 授業改善にかかわる相互参観実施（①）と授業検討会の開催（②）

司会：学部FD委員（伊藤博美）

日時：①相互参観 2025年11月10日（月）～27日（木）

②検討会 2025年12月9日（火）17:30 - 18:30

場所：①相互参観 教育学部棟（A203、A304、B308、C311）

②教育学部棟B120

参加者数：25名

内容：教育の要である授業について相互に検討を深めることを目的として、以下のように行った。

①11月10日（月）～27日（木）に、教員は以下の授業を1つ以上参観。

・川村先生、確率論・統計学、1,3年（新旧カリ合同）、11月10or17日（月）4限、A304

・丹羽先生、発達障害児等の教育、3年、11月17日（月）1限、A203、

知的障害児の心理、1年、11月26日（水）5限、A203

・安達先生、子どもの異文化間教育、3年、11月10日or17日（月）3限、

C311、外国語（英語）、2年、11月12日（水）1限、C311

・森先生、国語の指導法、3年、11月27日（木）2限、B308

②12月9日（火）の教授会・教育学研究科委員会後、授業検討会を開催。

上記4授業の授業者とその参観者が集まり、4グループをつくって話し合った。話し合いでは、まずグループ内で司会、タイムキーパー、記録、発表の役割分担と行い、次に「アクティブ・ラーニング支援パターンカード（ALPカード）」（クリエイティブシフト社・ベネッセコーポレーション2019年）に示されたアクティブ・ラーニングの方法について、参観した（または実施した）授業において実践されていたものを選択し、実践の具体的内容についてグループ

内で共有した。次に、ALPカードに示された方法から、自分が実践したいと思うものをあげ、理由を共有した。その後各グループが発表して全体に話し合いの内容を共有した。各グループの話し合いでは、授業改善に向けた様々なアイデアやヒントが盛り込まれており、フロア全体が刺激的な場となった。最後に司会から白石弘幸（2017）の「組織学習と学習する組織」の概要を説明し、構成員間がそれぞれの専門性を有しつつ、時にダブルグループまたは高次学習とアンラーニングを行い授業方法の向上を図る必要があることを共有した。

3 「明日の保育・教育」を考えるFD講演会：「椋山女学園大学における19年間」の開催

講師：中島正夫 特命教授

日時：2026年1月24日（土）15:50-16:50

場所：大学会館3階Spirit教室

参加者数：約200名

内容：「明日の保育・教育を考える」をテーマとするFD講演会では、講演者は年度末をもって退職される先生に依頼し、「最終講義」としてお話しいただいている。本年度は、中島正夫教授にご講義をお願いした。

中島正夫先生には、椋山女学園大学に19年に渡ってお勤めになられた間の数々のご業績やご活動を、先生が世界各地の美術館で鑑賞された絵画を交えてお話しいただいた。特に発達障害やASD等の特性のある子どもとその保護者を支援する自治体による体制整備に向けた取り組み、厚生省勤務時に担当した経験を踏まえた母子健康手帳制度に関するご研究、食育推進センターの初代所長として、学園内の園・校および事務局も含めた体制整備と食育基本指針の策定、実態調査の企画・実施・とりまとめ、大学キャンパスプロジェクトの推進、園や小学校での食育の技術支援などの取り組みなど、臨床だけでなく行政の経験も踏まえた熱意ある研究者の姿勢から学ぶべきことが多大にあった。最後に、中島先生も参加された教育学部音楽コースの学生と有志教員によるドラムジカの動画が流され、会場は感動に包まれた。

4 教育学部・教育学研究科外部評価結果報告会について

講師：鈴木裕子氏（名古屋柳城女子短期大学学長）

趣旨説明：磯部錦司学部長

日時：2026年2月10日（火）17:00-18:00

場所：教育学部棟B120

参加者数：27名

内容：教職・保育系は全国的に厳しい局面にあるなかで、椋山女学園大学教育学部・教育学研究科は、教育課程と質保証の完成度が高いというのが、外部評価委員全員に共通した総評であった。具体的には、①内部質保証が日常的に機能している、②学修成果の可視化がSugi-PORTによって実現されている、③理論と実践の往還が段階的に計画されている教育課程であること、④成果が進路実績によって証明されていること、⑤地域連携、国際化、ICTなど現代の教育課題に応答していることが肯定的な評価としてあげられた。他方、課題としては①良い教育を“社会に語る力”（伝え方・届け方）、②卒業後の成果追跡をエビデンスとして分析、社会還元する段階に進むこと、③「探究」を中心とした学校教育に向けた、学習過程を分析できる教師の養成（その基盤はできている）があげられた。今後は、学部と研究科の一体的な体制に基づき、高度専門職養成や現職教員の学び直しを見越し、総合学園の強みを生かして、地域の教育モデルの役割を果たすことが期待されるとのことであった。また講演後は参加者と活発な質疑応答が交わされた。

5 「大学広報戦略と学部広報に関する意見交換」の開催

講師：渡部真也広報課長

趣旨説明：磯部錦司学部長

日時：2026年3月10日（火）17:00-17:30

場所：教育学部棟B120

参加者数：26名

内容：磯部学部長より、外部評価でも指摘されていた全国的な教職・保育系の不人気という状況に抗するため、次年度の広報に向け、大学広報の戦略や考えについて共有することを目的としている旨、趣旨説明があった。

渡部課長からは、まず学生募集の定義（ブランディングの下に広報／PRおよび学生募集があること）、メディアの分類（本学で所有・運営する情報発信メディアと、マスコミやネット媒体の広告枠を購入するペイドメディア、SNSや動画共有サイトなどのシェアドメディア）が示された上で、認知から出願までのマーケティングが、MA（マーケティングオートメーション）、CRM（顧客関係管理）へと細分化・可視化されていることが紹介された。次に高校生の進学決定プロセスの探索→評価→決定に対して、コントロールが中程度である評価の段階に「その大学でしか得られないもの」（＝価値）を高校生に見出させることが重要と説明された。こうした広報の基礎知識を基に、渡部課長から、情報提供および公式WEBサイトでの情報発信の再評価と、学生の声の収集／分析をお願いしたい旨の話があった。最後に、参加者との活発な質疑応答が交わされた。

【2】授業アンケートの振り返り

本年度の本研究科の大学院生は1名であったため、アンケートではなく聴き取り形式で授業について語ってもらった。

聴き取りの結果、昨年度は他の授業等との合同実施があることなどにやや戸惑った面もあったが、今年度は大学院生として指導を受けることにも十分に慣れ、学会誌に論文を投稿するなどアカデミックな活動にも精力的に参加し、自身の研究を基軸としていっそう学修を深めることができた、という思いを把握することができた。

6 FD委員会名簿

2025年度全学FD委員会委員

所 属	職位	氏名	選出区分
副学長	教授	五百部 裕	副学長
生活科学部	准教授	川野 紀江	学部FD委員
外国語学部	教授	水島 和則	学部FD委員
人間関係学部	准教授	松浦 直毅	学部FD委員
情報社会学部	教授	栗本 英和	学部FD委員
現代マネジメント学部	講師	瀧澤 創	学部FD委員
教育学部	教授	伊藤 博美	学部FD委員
看護学部	准教授	又吉 忍	学部FD委員

2025年度大学院FD委員会委員

所 属	職位	氏名	選出区分
副学長	教授	五百部 裕	副学長
生活科学研究科	准教授	川野 紀江	研究科FD委員
人間関係学研究科	教授	加藤 容子	研究科FD委員
現代マネジメント研究科	講師	瀧澤 創	研究科FD委員
教育学研究科	准教授	古市 直樹	研究科FD委員

相山女学園大学・大学院FD活動報告書（2025年度）

相山女学園大学・大学院ファカルティ・ディベロップメント
第13号（通巻 第26号）

2026（令和8）年6月発行

編 集 相山女学園大学全学FD委員会・大学院FD委員会

発 行 相山女学園大学

〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町17-3

TEL 〈052〉781-1186（代）